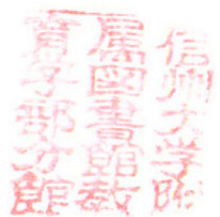


長野県更埴市

屋代清水遺跡Ⅱ

—科野の里ゲートボール場建設に伴う発掘調査報告書—



2 0 0 3

更埴市教育委員会

長野県更埴市

屋代清水遺跡II

—科野の里ゲートボール場建設に伴う発掘調査報告書—

2 0 0 3

更埴市教育委員会



黥面付土器・土偶



1号土坑出土土器





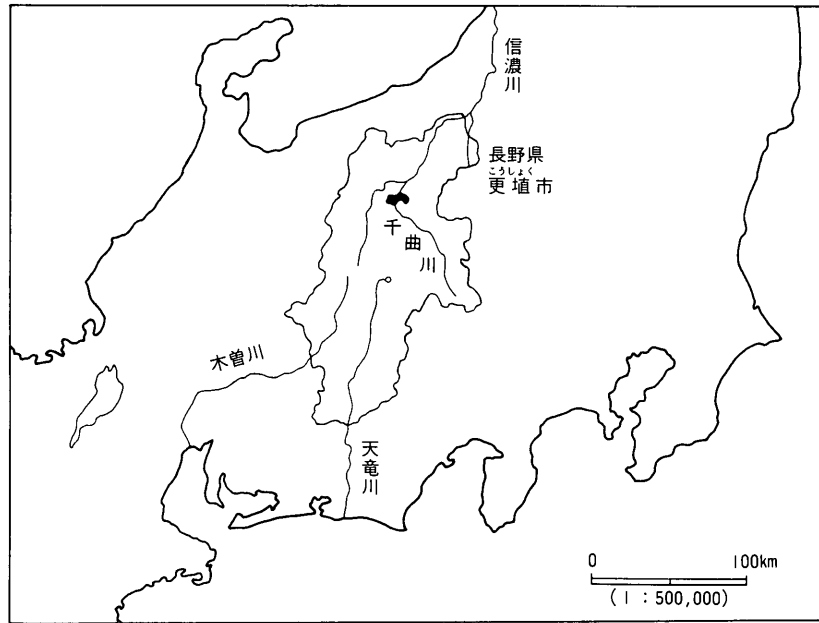
55号土坑



55号土坑出土土器

例 言

- 1 本書は、平成13年度に科野の里ゲートボール場建設に伴い実施した、屋代清水遺跡発掘調査報告書である。
- 2 本書の編集は小野紀男が行った。
- 3 現場における実測図及び遺物の実測は小野及び国光一穂が行った。
- 4 本文中の遺構・遺物実測図の縮尺及び表現は原則的に下記のとおりであるが、一部異なるものがある。
 - ・遺構：掘立柱建物跡… $\frac{1}{60}$ 土坑… $\frac{1}{30}$ 溝… $\frac{1}{60}$
 - 遺物：土器… $\frac{1}{4}$ 土器拓影… $\frac{1}{3}$ 土製品… $\frac{1}{2}$ 石器… $\frac{1}{2}$
 - ・遺構図版の  は焼土、 は炭化物を表している。
 - 遺物図版のうち、須恵器は断面を黒塗りで表現した。
 - ・遺構の主軸方向は長軸または北壁を中心に設定した。
- 5 本書中の図版の方位は、平面直角座標系第VIII系の座標北を示す。また標高は海拔 m、遺構の規模は cm で示した。
- 6 本調査に伴う出土遺物、実測図、写真等の資料は全て更埴市教育委員会が保管している。なお、出土遺物には屋代清水遺跡第4次調査を略して「YSM 4」と表記した。



更埴市の位置

目 次

例言・目次

第1章 調査の概要…………… 1

第2章 発掘調査に至る経過…………… 2

第3章 遺跡の環境…………… 3

第4章 遺構と遺物

 第1節 掘立柱建物跡…………… 5

 第2節 土坑…………… 6

 第3節 溝……………19

 第4節 その他の遺構と遺物……………21

 土坑一覧表……………26

第5章 まとめ……………28

写真図版

報告書抄録

第1章 調査の概要

- 1 調査遺跡名 ^{やしるしみず} 屋代清水遺跡（市台帳No.29-1）
- 2 所在地及び
土地所有者 更埴市大字屋代字清水260番地
更埴市土地開発公社
- 3 原因及び
事業委託者 公共事業＝科野の里ゲートボール場建設に伴う発掘調査
更埴市（体育課）
- 4 調査の内容 発掘調査 約600㎡
- 5 調査期間 発掘調査 平成14年2月25日～平成14年4月5日
整理調査 平成14年6月3日～平成15年3月28日
- 6 調査費用 3,225,786円
平成13年度 2,374,224円
平成14年度 851,562円
- 7 調査主体者 更埴市教育委員会
担当者 小野紀男 更埴市教育委員会
調査参加者 石黒武雄 唐沢並雄 北澤三枝子 国光一穂 久保高久 小林健朗
清水嘉裕 高野貞子 富沢豊延 中村文恵 宮崎恵子 柳沢君雄
事務局 更埴市教育委員会生涯学習課
教育長 下崎文義
教育次長 松下 悟
課長 柳原康廣
文化財係長 矢島宏雄（金井幸二 前任者）
文化財係 小野紀男（佐藤信之）
- 8 種別・時期 墳墓跡 縄文時代晩期～弥生時代中期
水田跡 平安時代～中世
- 9 遺構・遺物 掘立柱建物跡 1棟
土坑 76基
溝 3基
ピット 71基
出土遺物 土器片・土製品・石器等 縄文時代～中世 コンテナ10箱

第2章 発掘調査に至る経過

平成13年12月、更埴市教育委員会体育課より長野県立歴史館隣接地において、屋内ゲートボール場の建設を計画しているとの連絡があった。当該地は屋代清水遺跡として周知されており、長野県立歴史館建設に伴う発掘調査において、多くの遺構・遺物が検出されていたため、建設に先立ち発掘調査が必要な旨、報告を行った。

平成14年1月に入り、文化財保護法第57条に基づく通知が提出され、調査時期、方法等について協議を行った。その結果、工事着手が平成14年度の前半に予定されていることから、発掘調査は平成13年度中に実施することとなった。また、整理作業及び報告書作成については平成14年度に実施することとした。市教委ではこれを受け、直ちに調査の準備に取り掛かった。

平成14年2月25日より重機による表土剥ぎを開始した。長野県立歴史館の調査成果からは、本調査地周辺にかけては遺構・遺物の密度が希薄になってくるとの想定がなされていたが、予想に反して検出面からは多量の遺物が出土した。3月31日に現場における調査を終了し、4月5日埋め戻しを完了した。

平成14年6月より整理作業を開始したところ、10数点に及ぶ黥面付土器・黥面土偶が出土していたことが明らかとなり、遺跡の重要性が改めて確認された。また、平成14年9月～11月にかけて、飯田市上郷考古博物館企画展に出土遺物の一部を貸出・展示した。

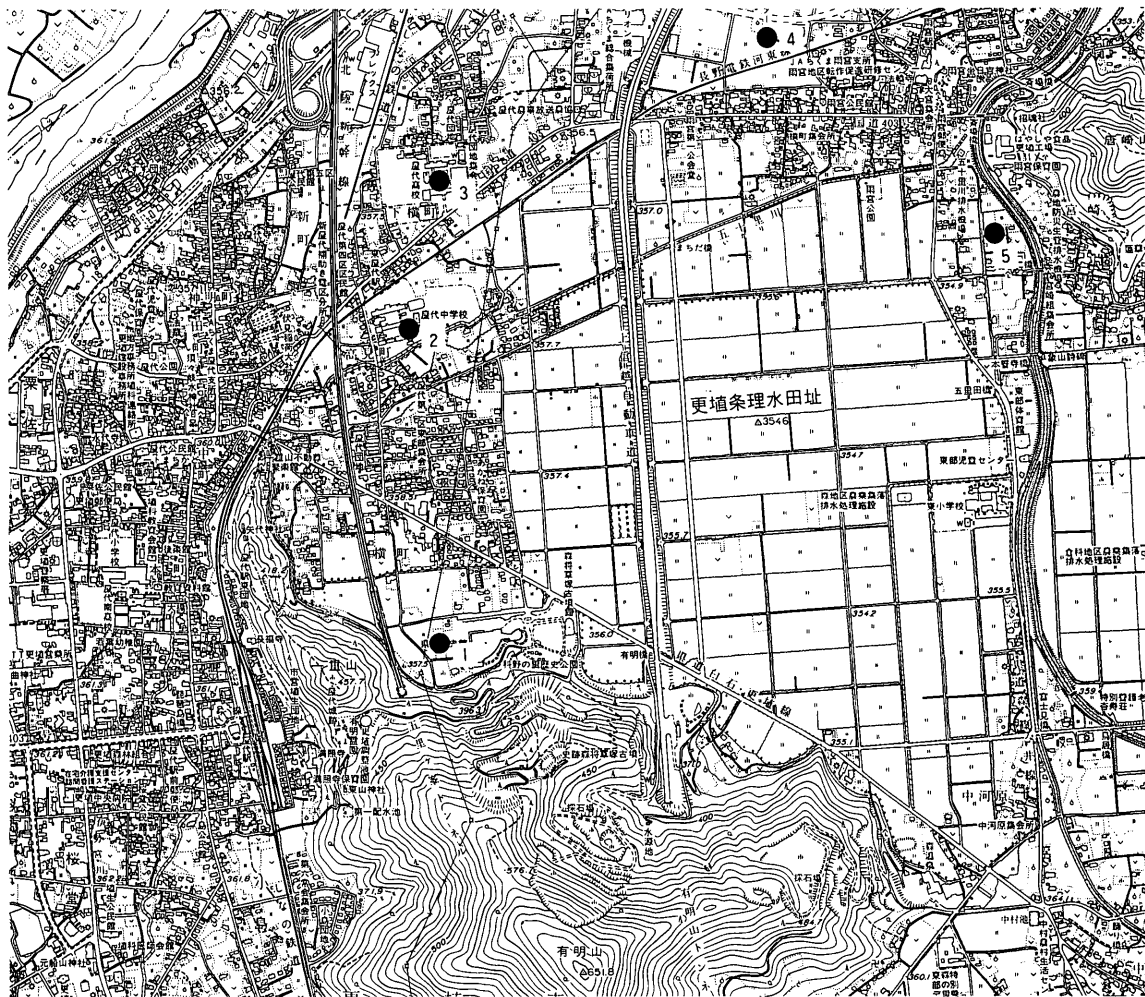
調査日誌

- 2月25日 重機による表土剥ぎ開始・検出面より多量の遺物出土
- 2月26日 機材搬入
- 3月1日 凍上の恐れがあるため、シートにより検出面を保護
- 3月4日 作業員入り、検出作業開始・1号土坑検出
- 3月6日 雪のため作業中止
- 3月7日 基準点測量実施
- 3月14日 遺構掘り下げ開始・検出作業続行
- 3月18日 検出終了
- 3月22日 遺構実測開始・掘り下げ続行
- 3月27日 雨のため作業中止
- 3月28日 遺構掘り下げ終了
- 3月29日 全体写真撮影・作業員本日を持って終了
- 3月31日 実測作業終了
- 4月4日 重機による埋め戻し開始 機材撤収
- 4月5日 埋め戻しが完了し、現場における作業終了

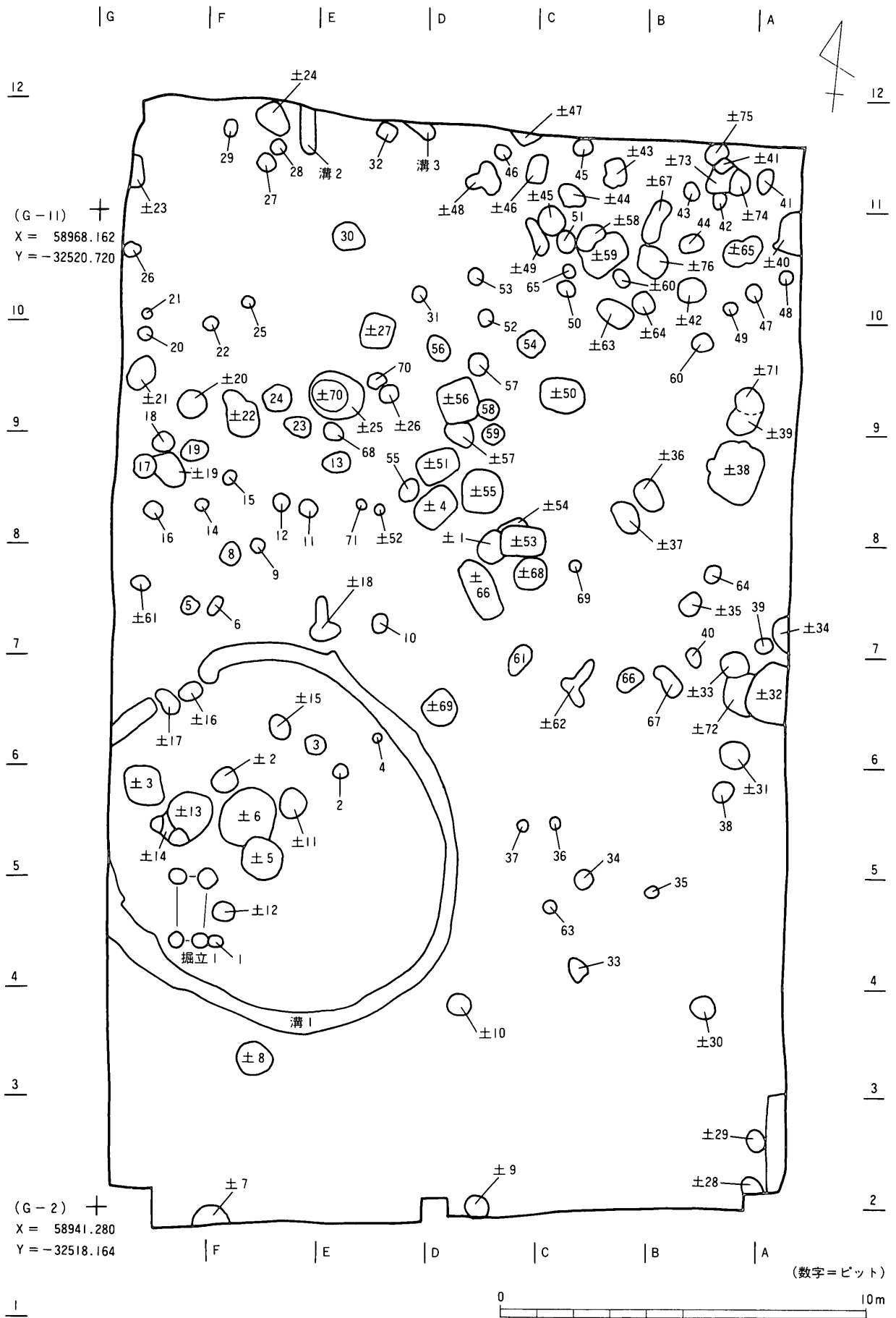
第3章 遺跡の環境

発掘調査地は、東経138度8分12秒、北緯36度31分50秒、海拔356m付近に位置し、長野県更埴市大字屋代字清水に所在する。遺跡は千曲川が北西から北東に大きく流れを変える部分の東岸に形成されたものである。千曲川の自然堤防上は大きく屋代遺跡群として把えられていて、更埴市最大の遺跡群となっている。屋代遺跡群は縄文時代中期初頭から続く遺跡であることが上信越自動車道建設に伴う調査で明らかとなった。また、7世紀後半代と考えられる国府木簡や大型の掘立柱建物跡などが検出されており、周辺に官衙が存在していた可能性が指摘されている。自然堤防の南側の後背湿地は「屋代田んぼ」と呼ばれ、古くから水田として利用されており、地表下約1mには埋没条里遺構が良好な状態で残されている。遺跡はこの自然堤防の南端、一重山との接点部に位置している。遺跡を見下ろす山頂には県下最大の前方後円墳である森将軍塚古墳が築造されている。

調査地周辺では、平成3年度に長野県立歴史館建設に伴い発掘調査が実施され、縄文時代晩期～古墳時代中期にかけての住居跡などが検出されている。特に、縄文時代晩期最終末に位置付けられた埴を伴う土坑が数基検出されており、今回の調査成果との関連性を窺うことができる。



1 屋代清水遺跡 2 大塚遺跡 3 馬口遺跡 4 町浦遺跡 5 生仁遺跡
第1図 遺跡位置図 (1:20,000)



第2図 屋代清水遺跡全体図 (1:150)

第4章 遺構と遺物

第1節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (第3図)

位置：F・G-4・5 規模：1間(175cm)×1間(75cm) 平面形：長方形

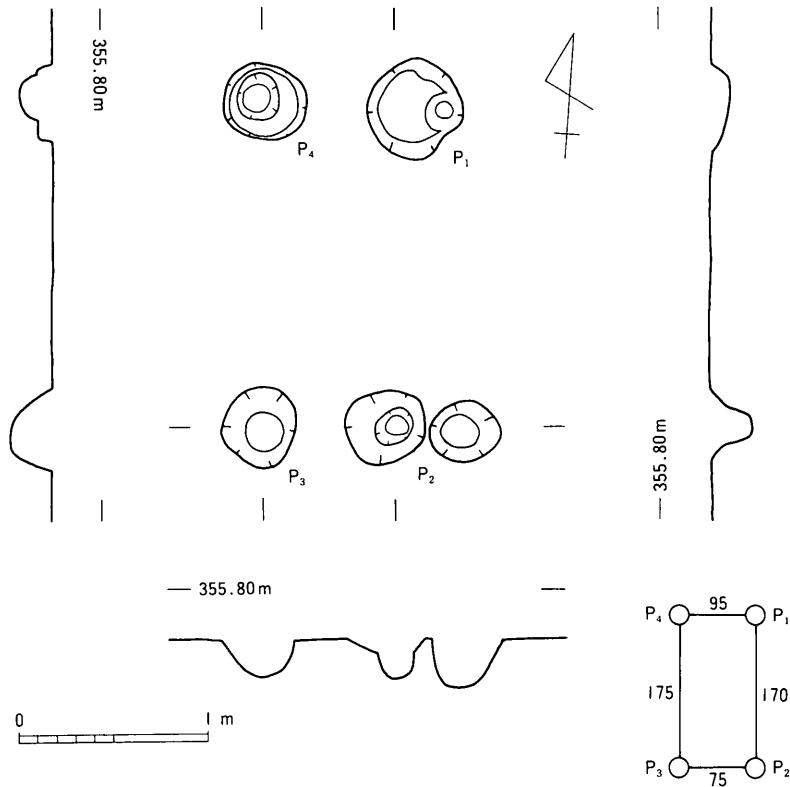
長軸方向：N-5°-W 新旧関係：なし

柱掘方：柱穴はいずれも直径40cm程度の円形を基本としている。検出面からの深さは25cm前後を測ることができるが、上部が削平されているため、掘方は更に深かったものと思われる。P₁・P₂・P₄には直径10cm前後の柱痕が残っている。

柱間：桁行はP₃~P₄間で175cmを測る。梁間はP₂~P₃間で75cm、P₁~P₄間で95cmを測ることができ、北側の梁間が20cm程広がっている。1間×1間の小形の建物であり、平地式住居や倉庫になるものではないと考えられる。

遺物：柱掘方内から土器の小破片がわずかに出土しているのみで、図化できるものはない。

周辺遺構との関係：遺構は1号溝の内部から検出したものであり、この溝と何らかの関連のある可能性が指摘できる。また溝の中央付近からは黥面付土器を出土した6号土坑を検出していることから、これらを一連の遺構として考えると、この建物跡は墓前祭祀に関わったものである可能性が考えられる。この他にも、調査区内からは多数の柱痕を持つピットを検出しているが、建物跡としてその配列を認識することはできなかった。



第3図 1号掘立柱建物跡

第2節 土坑

1号土坑 (第4・5図、図版2・6)

位置：D-7・8

規模：86cm×64cm

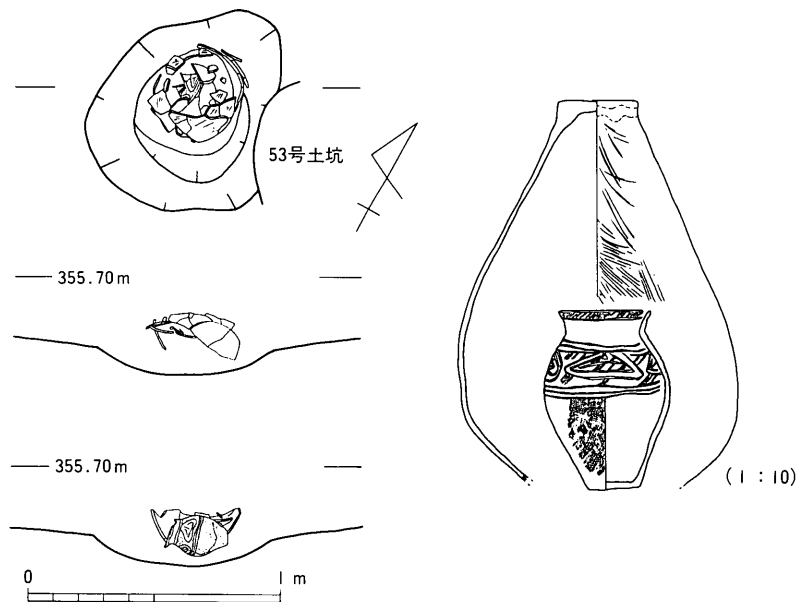
平面形：不整形

新旧関係：53号土坑より古

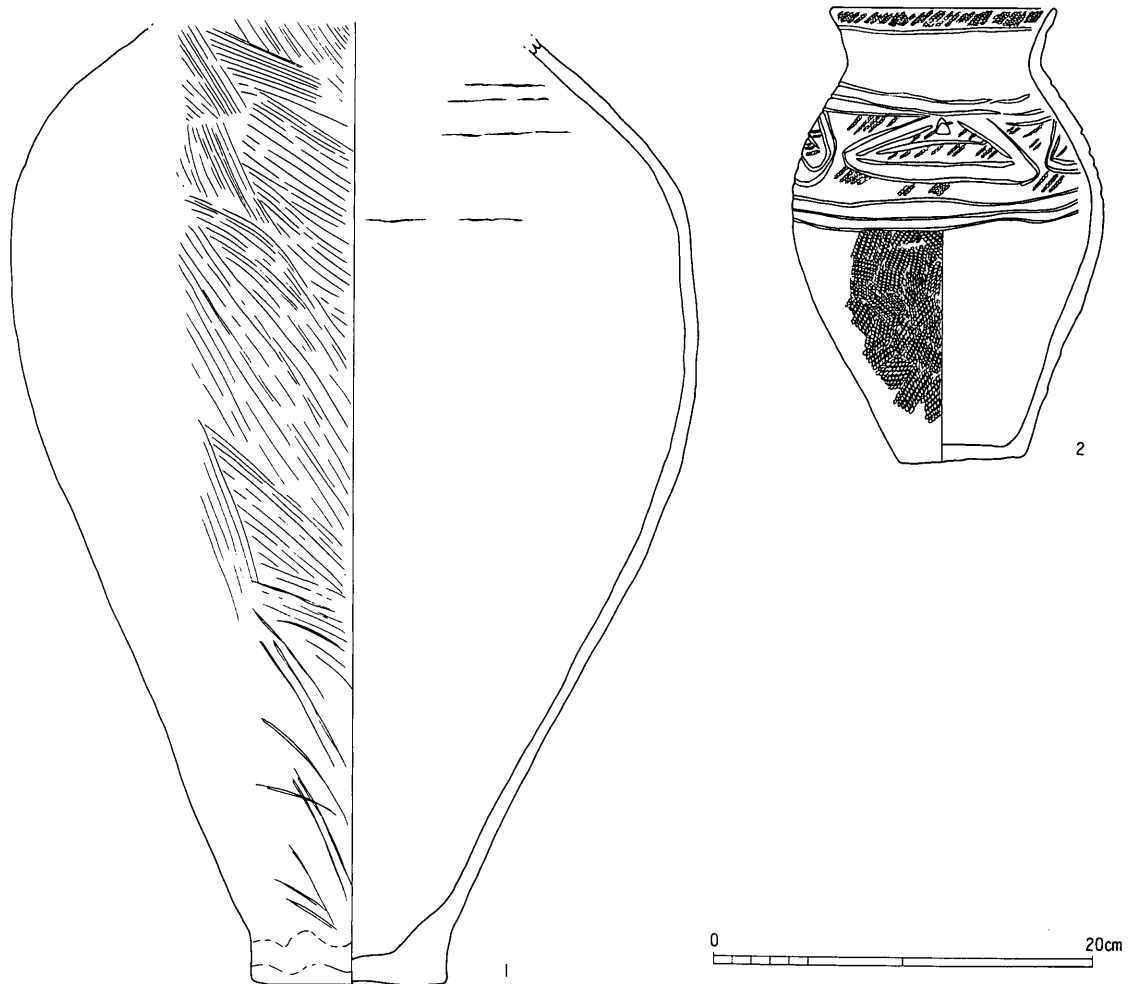
構造：径80cm程の不整形の土坑の中に壺形土器が埋設されていたものであるが、上部が削平されているものと考えられるため、掘り込みはほとんど残っていない。このため、土坑本来の形状は楕円形もしくは長方形を呈していた可能性がある。検出面からの深さ最大15cmを測る。壺形土器は頸部を欠いた大型の壺形土器を逆位の状態で伏せ、その内部に入れ子の状態で小型の壺形土器が埋設されていたものである。外側の壺形土器は高さ20cm程が現存していただけであるが、復元すると高さ50cmを超えるため、土坑の深さは本来50cm以上あったものと考えられる。また、中側の壺形土器は横位の状態で検出しているが、外側の壺形土器から横位での状態では入れることができないため、正位の状態で埋設されていたものが倒れ込んだものと考えられる。

遺物：出土遺物は埋設されていた壺形土器2点のみである。また、中側の壺形土器内部から、歯を含む少量の骨片が出土している。1は外面に粗い条痕文が施された大形の壺形土器である。頸部で打ち欠かれているが現存高50cmを測る。逆位の状態で伏せられていたため、口縁部は残っていない。内面には輪積痕をわずかに残すが器面荒れが著しく、調整は不明である。また、底部には木葉痕を残している。2は小形の壺形土器であり、蔵骨器として使用されたものと考えられる。胴部上面には沈線による三角形文が施されている。口唇部及び胴部外面には縄文が施され、胴部文様帯の縄文は磨り消されている。また、外面には黒色の有機物が付着している。

壺形土器の内部から骨片が出土していることから、土器棺再葬墓であると考えられる。内部からは骨片と共にわずかながら炭化物が出土していることから、火葬骨を再葬した可能性が考えられる。



第4図 1号土坑及び土器棺埋設推定図



第5図 1号土坑出土遺物

4号土坑（第6図、図版2・6）

位置：D・E-8

規模：120cm×88cm

平面形：隅丸長方形

主軸方向：N-39°-E

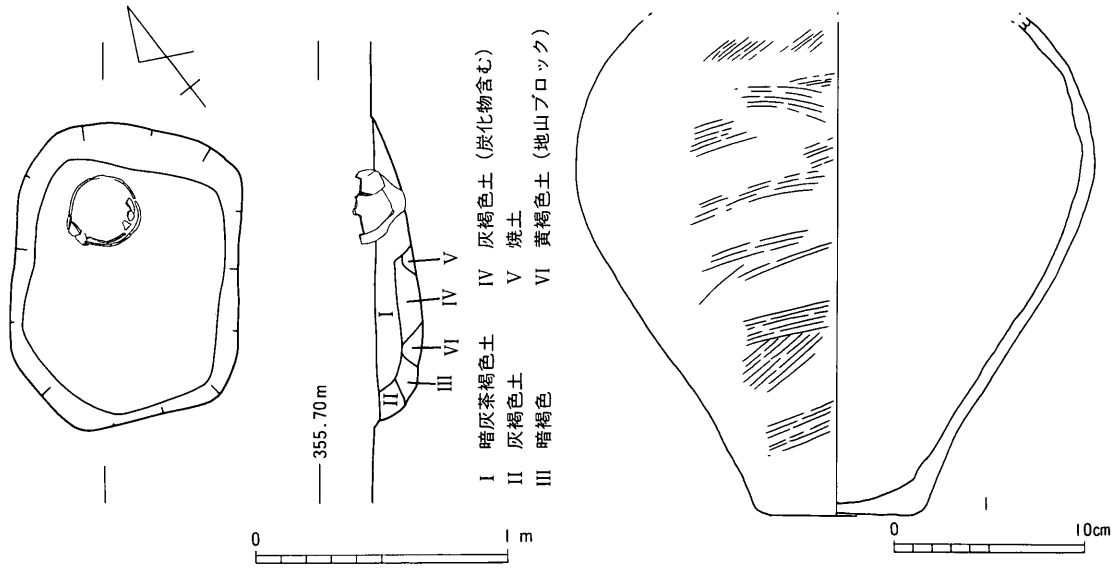
新旧関係：なし

構造：平面形は隅丸長方形を呈しており、検出面からの深さ最大20cmを測る。土坑内北西隅に近いところより、壺形土器の下半部が正位の状態で出土したものである。

覆土：大別して5層に分けることができる。土層断面の観察ではI層及びII～VI層で別々の土坑として捉えることも可能であるが、平面ではその差異を検出することはできなかった。I層は壺形土器が埋設されていた覆土であり、単一層である。V層は焼土、IV層は炭化物の混じった層である。

遺物：図化できた遺物は埋設されていた壺形土器1点のみであり、その他には小破片がわずかに出土しているだけである。1の外面には粗い条痕文が認められるが、器面荒れが著しく詳細は不明である。また、底部には敷物の圧痕が残っているがどのようなものかは不明である。

土器内部や覆土からは何も出土しなかったが、その構造から土器棺再葬墓であると考えられる。また、下層の土坑については炭化物及び焼土が検出されていることから、火葬墓あるいは火葬骨を再葬した土坑であった可能性が指摘できる。



第6図 4号土坑及び出土遺物

5号土坑 (第7・8図、図版3・6)

位置：F-5

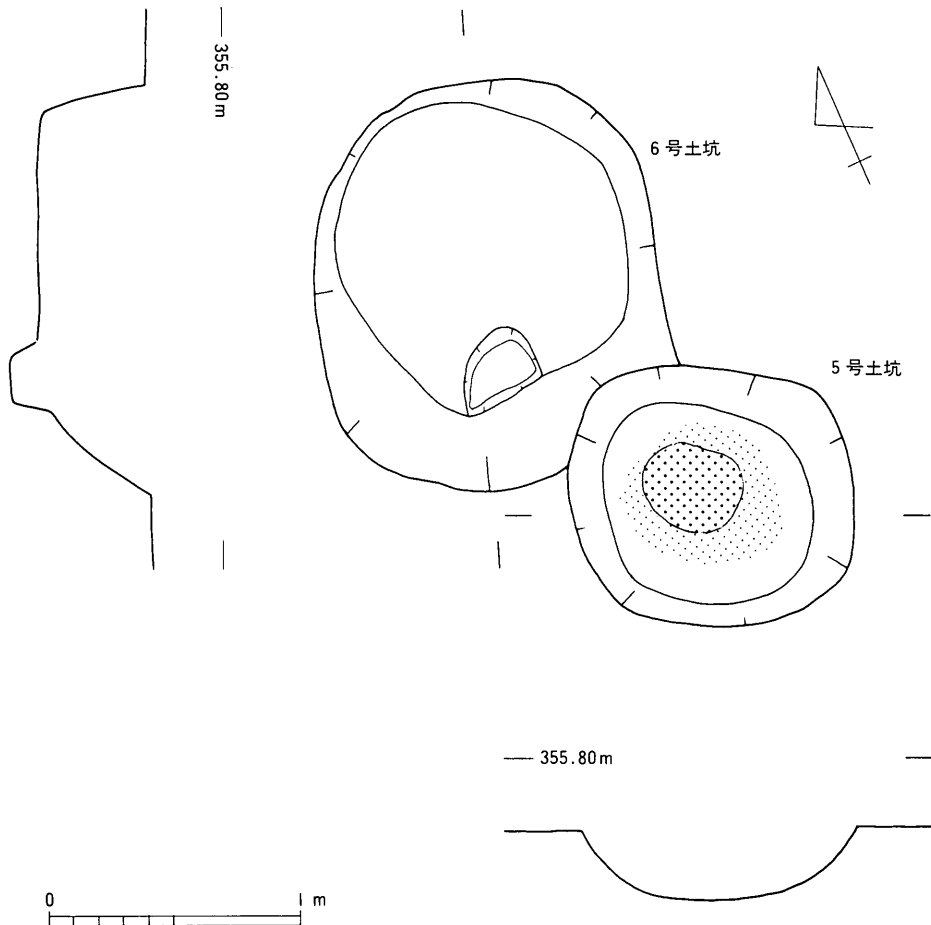
規模：112cm×102cm

平面形：隅丸方形

主軸方向：N-66°-W

新旧関係：6号土坑より新

構造：1号溝のほぼ中心付近から検出したものである。検出面からの深さ最大25cmを測り、底面中央に焼土、その周囲には炭化物が広がっているが、焼土は焼け締まっていない。また、覆土中からは



第7図 5・6号土坑

骨粉が出土している。

遺物：出土遺物は比較的多いが、図化できたものは少ない。1は底部であり内面には煤が付着している。2は壺形土器である。口縁は波状を呈し、外面には変形工字文が認められる。3は鉢形土器の体部である。口縁部に近いと思われる所に2段の隆帯が巡り、その下には条痕文が施されている。4は条痕文が施された土器の体部であり、3と同一個体と考えられる。

周辺遺構との関係及び覆土中より骨粉が出土していることから、火葬墓もしくは火葬骨を再葬した再葬墓と考えられる。

6号土坑（第7・8図、図版3・7）

位置：F-5

規模：160cm×136cm

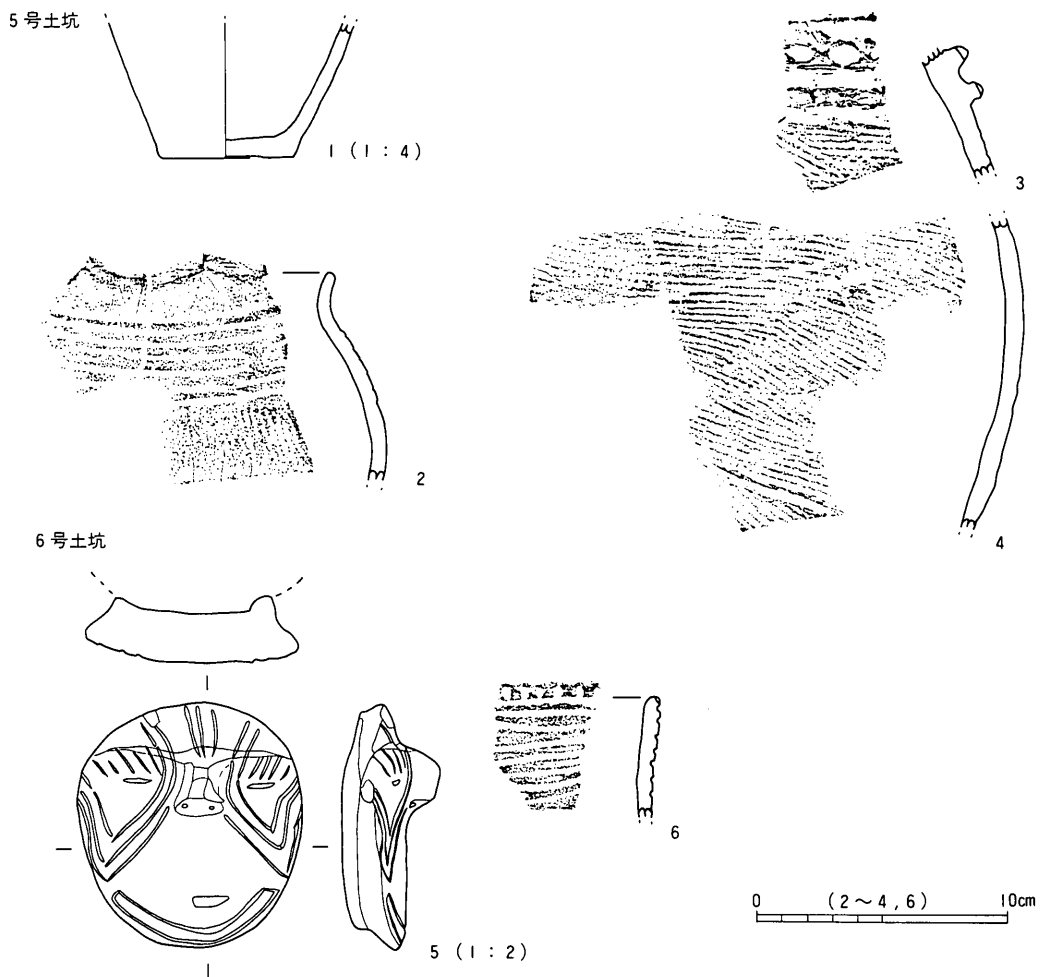
平面形：楕円形

主軸方向：N-12°-E

新旧関係：5号土坑より古

構造：平面形は楕円形をしており、検出面からの深さ最大45cmを測る。また土坑南隅に小ピットを検出している。覆土中からは骨片が出土している。

遺物：5は黥面付土器であり、黥面部のみ完存しているが、土坑内からは同一個体と考えられる破片は全く出土していない。入墨及び目、口の表現は鋭い沈線によって表されており、眉と鼻は粘土を貼り付けている。また、沈線の内部には赤色顔料の付着が認められるため、赤彩されていた可能性があ



第8図 5・6号土坑出土遺物

る。6は壺形土器の口縁部である。端部には刻みが付けられ、8条以上の沈線が巡っている。

骨片が出土していることから、再葬墓と考えられる。

7号土坑（第9図、図版7）

位置：F・G-1

規模：100cm×

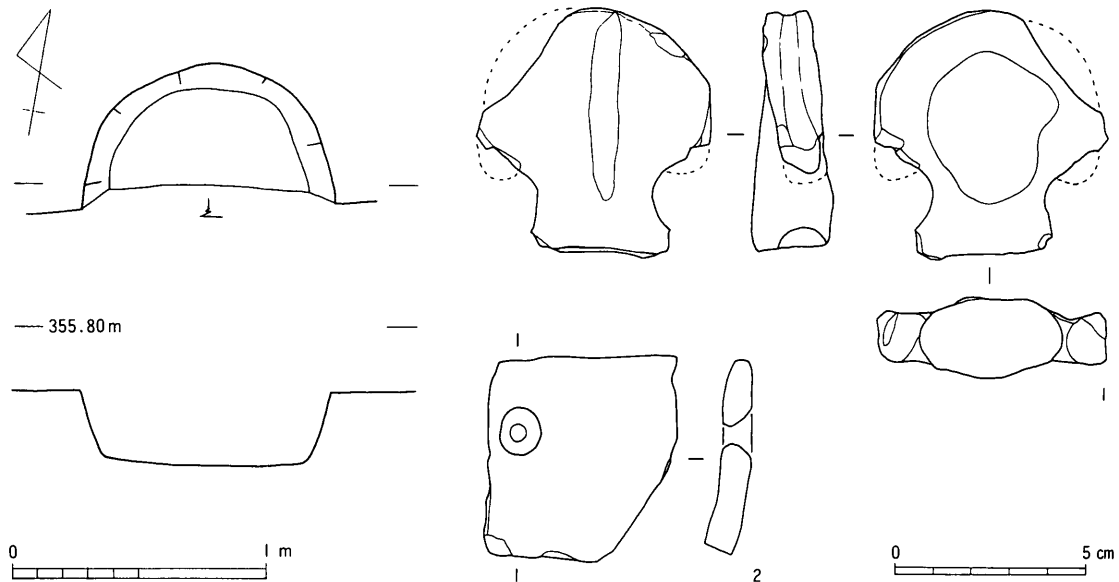
平面形：円形？

新旧関係：なし

構造：南側が調査区外になるため、全体の半分ほどを検出ただけである。平面形は円形もしくは楕円形になるものと考えられ、検出面からの深さ最大30cmを測る。

遺物：1は土偶の頭部である。顔面は剥落しているが、平面形は半円形をしており、耳飾りの痕跡と思われる貫通孔を残している。また、側面及び裏面には沈線が施されている。2は土器片加工板であり、直径1cm程の円孔が穿たれている。

出土遺物や土坑の形状から、再葬墓である可能性が考えられる。



第9図 7号土坑及び出土遺物

9号土坑（第10図、図版7）

位置：D-1・2

規模：直径60cm

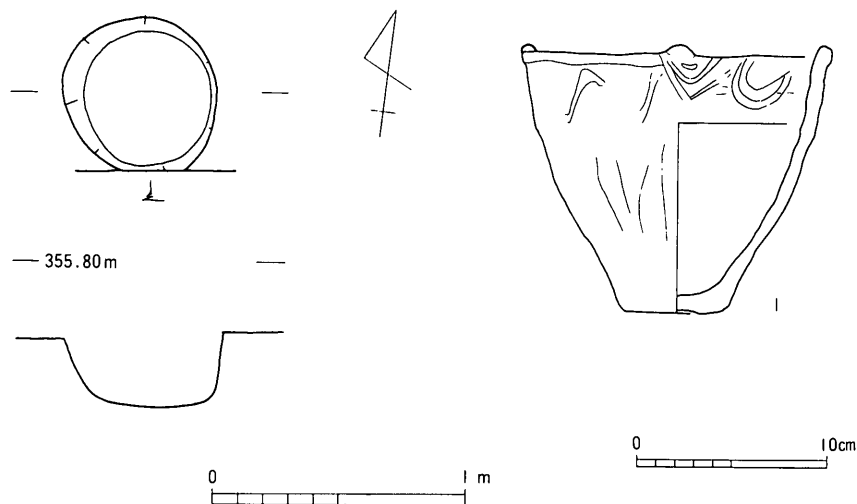
平面形：円形

新旧関係：なし

構造：一部調査区外になるが、ほぼ円形の土坑である。掘り込みは垂直に近く、検出面からの深さ最大30cmを測る。

遺物：図示した1点のみが出土した。1は鉢形の土器であり、口縁部には突起が貼り付けられている。外面上部には稲妻文あるいは円弧文ともとれる条痕文が施されている。内面は黒褐色をしており、粗いヘラミガキが認められる。また、口縁端部には2条の沈線が刻まれている。

覆土中から骨片の出土はなかったが、鉢形土器が1個体分出土していることから、土器棺再葬墓である可能性が指摘できる。



第10図 9号土坑及び出土遺物

13号土坑 (第11・12図、図版7)

位置：G-5

規模：116cm×114cm

平面形：不整楕円形

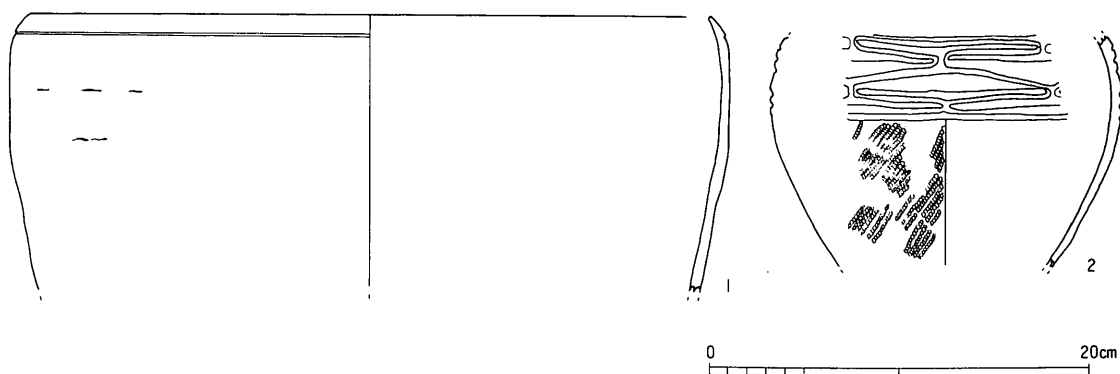
主軸方向：N-41°-E

新旧関係：14号土坑より新

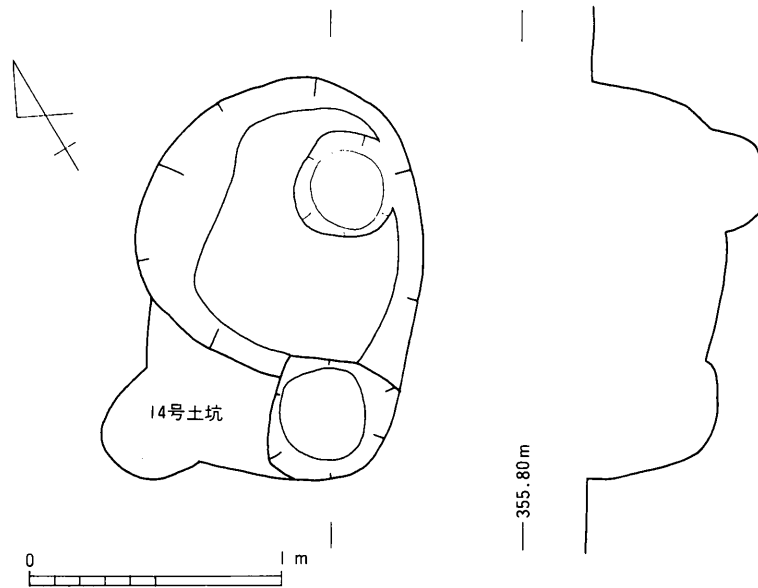
構造：北東隅に径40cmほどのピットを持つ不整楕円形の土坑である。掘り込みにはやや角度が認められ、検出面からの深さ最大55cmを測る。また、南側は別のピットにより攪乱されている。

遺物：出土量は少なく、図化できたものは2点のみである。1は無文の深鉢形土器である。口縁部は内わんし、その下には1条の沈線が巡っている。内外面とも粗いヘラミガキが認められるが、所々に輪積痕を残している。2は壺形土器の体部である。外面上部には工字文が認められ、その下には縄文が施されている。工字文の部分のみヘラミガキされている。

覆土中から骨粉等の出土はなかったが、周辺遺構との関係から再葬墓の可能性もある。



第11図 13号土坑出土遺物



第12図 13号土坑

15号土坑（第13図、図版7）

位置：F-6

規模：68cm×53cm

平面形：楕円形

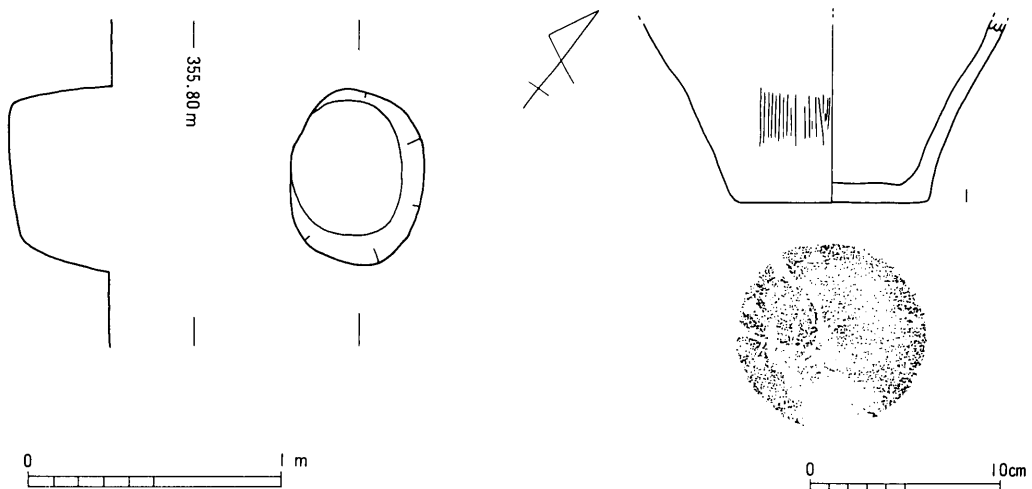
主軸方向：N-37°-W

新旧関係：なし

構造：1号溝の内側から検出したものであり、検出面からの深さ最大40cmを測る。掘り込みは垂直に近く、一部オーバーハングしている部分もある。

遺物：出土遺物は少なく、図示した1点のみである。1は壺形土器の底部になるものと考えられ、外面には細密な条痕文が施されているが、器面荒れが著しいため判然としない。また、底部には木葉痕及び楯状工具によるへら記号が認められる。

覆土中からは少量の土器片以外、何も出土していないが、周辺遺構の状況から15号土坑も再葬墓である可能性が指摘できる。また、1号溝の内側に作られていることから、この溝との関連についても注目していかなければならない。



第13図 15号土坑及び出土遺物

22号土坑（第14図、図版8）

位置：F-9

規模：104cm×82cm

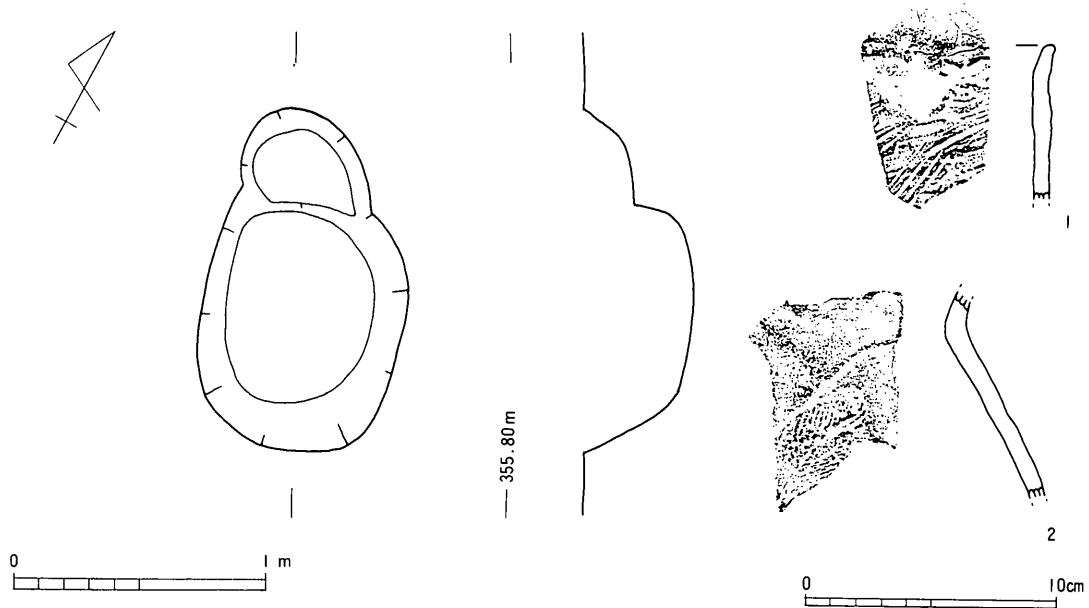
平面形：隅丸長方形

主軸方向：N-26°-W

新旧関係：なし

構造：隅丸長方形の土坑と直径45cm程度のピットを重複して検出したものであるが、平面では確認できなかったため、1つの遺構としてしまったものである。掘り込みは比較的なだらかであり、検出面からの深さ最大40cmを測る。

遺物：出土遺物は非常に少ない。1は鉢形土器の口縁部になるものと思われる。口唇部に粘土の貼付けを行っており、その下には条痕文が認められる。2は壺形土器になるものと思われ、体部外面には木葉状の線刻が認められる。



第14図 22号土坑及び出土遺物

25号土坑（第15図、図版3・4・8）

位置：E・F-9

規模：150cm×126cm

平面形：楕円形

主軸方向：N-73°-W

新旧関係：70号土坑より古

構造：壺形土器が出土したことによってその存在が明らかとなったもので、掘り込みは最大で10cm程度しか残っていない。大部分が削平されてしまったものと思われる。平面形は楕円形を呈するが、中央付近を70号土坑によって破壊されている。また、南隅ほぼ中央付近からは直径20cm程の小ピットを検出している。

遺物：出土遺物は非常に少なく図化できたものは1点のみである。1は土坑東側から出土した壺形土器の底部である。横倒しの状態で出土したものであるが、体部があったと思われる所は70号土坑に破壊されており現存していない。体部外面には「V」字状になる細密な条痕文が認められ、底部には木葉痕が残っている。大部分が削平されているため、覆土中からは骨片等は出土していない。

周辺遺構との関係や、土器の出土状態から土器棺再葬墓である可能性が指摘できる。

70号土坑 (第15図)

位置：E・F-9

規模：100cm×80cm

平面形：楕円形

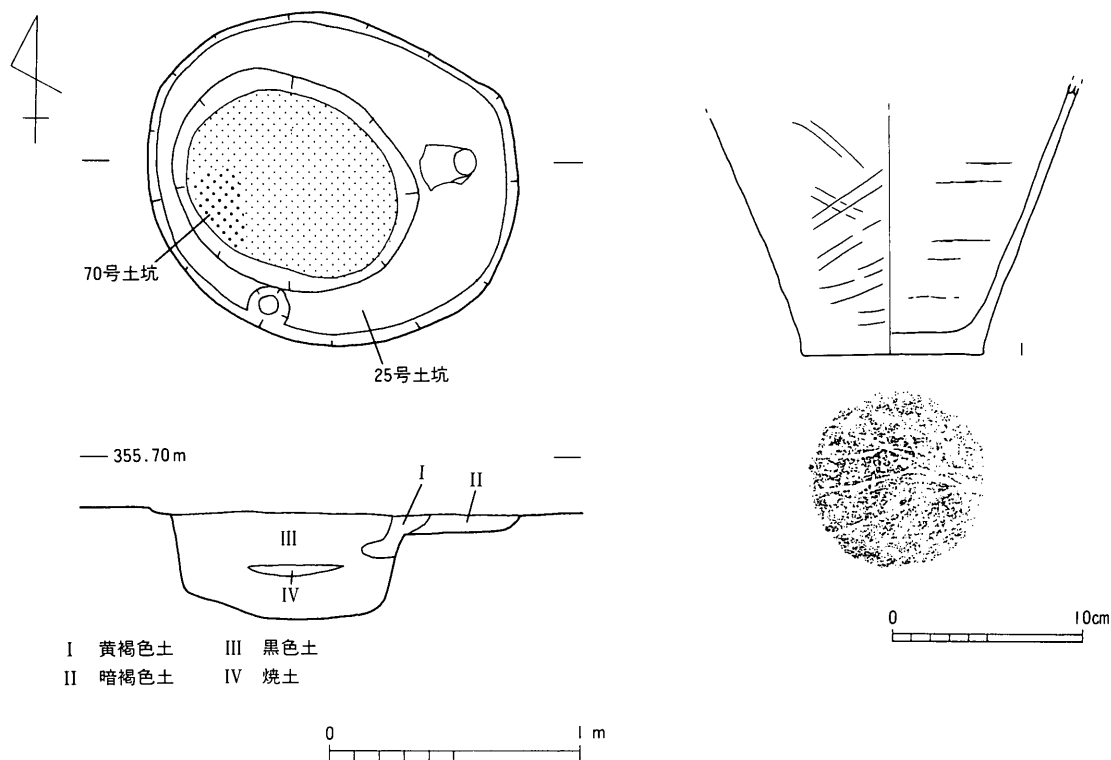
主軸方向：N-73°-W

新旧関係：25号土坑より新

構造：覆土は炭化物や焼土の混じった黒色土であり、検出面からの深さ最大35cmを測る。底面南西隅には焼土が認められ、その周囲には炭化物が広がっている。覆土中からは骨粉が出土している。

遺物：土器の小破片がわずかに出土しているだけであり、図化できるものはない。

骨粉が検出されていることから火葬墓もしくは再葬墓と考えられる。



第15図 25・70号土坑及び出土遺物

32号土坑 (第16・17図)

位置：A・B-6

規模：160cm×

平面形：方形

主軸方向：N-72°-W

新旧関係：72号土坑より新

構造：東側が調査区外になるため、全体の半分ほどを検出しただけであるが、方形の土坑になるものと思われる。検出面からの深さ最大60cmを測る。

遺物：出土遺物は比較的多いが図化できたものは少ない。1は壺形土器の底部であり、底面にはへラ記号が認められる。2は壺の体部であり、沈線及び縄文が認められる。

33号土坑 (第16・17図)

位置：B-6・7

規模：直径74cm

平面形：円形

新旧関係：72号土坑より新

構造：円形の土坑であり、検出面からの深さ最大35cmを測る。覆土中からは骨粉が出土している。

遺物：出土遺物は少ない。3は壺形土器の底部である。4は鉢形土器の口縁部であり、口唇部に粘土の貼り付けが認められる。5の底面には木葉痕とともにへラ記号が認められる。

骨粉が検出されていることから再葬墓と考えられる。

72号土坑 (第16・17図)

位置：B-6

規模：110cm×

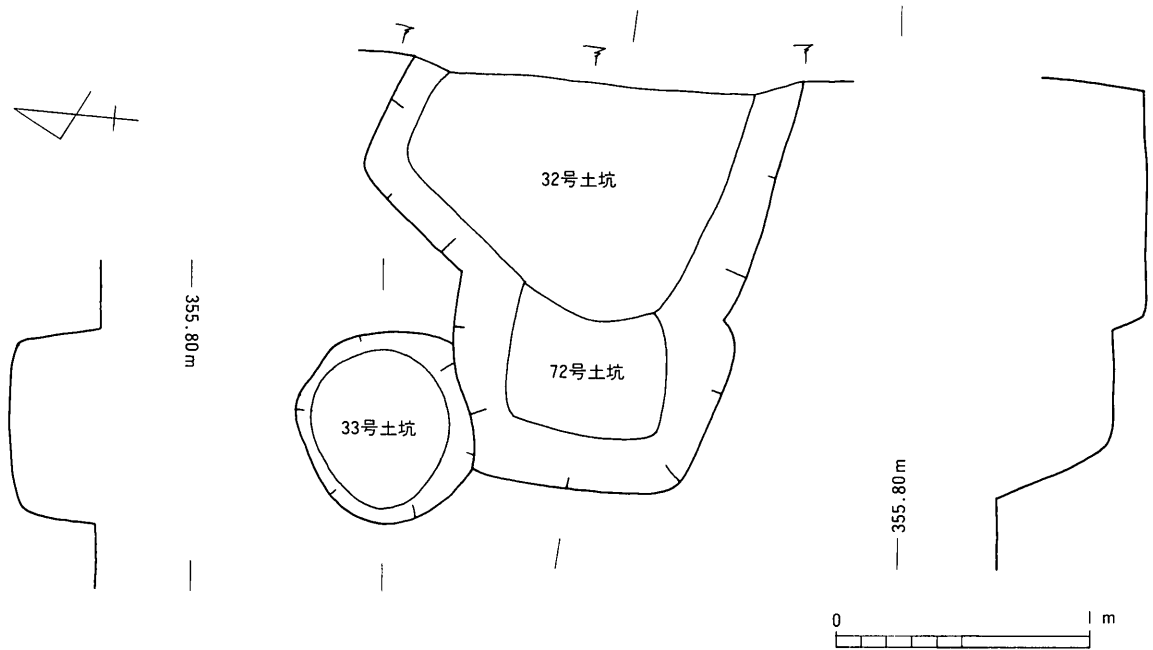
平面形：方形

主軸方向：N-0°-W

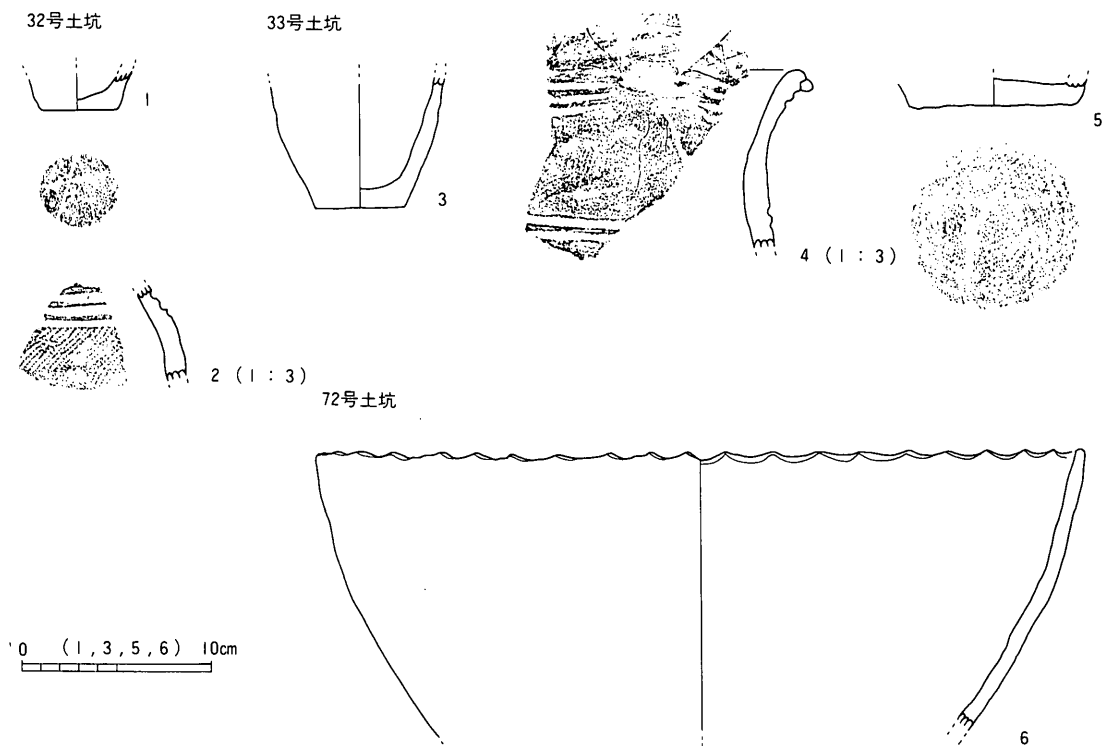
新旧関係：32・33号土坑より古

構造：平面形は方形をし、掘り込みには角度が認められる。検出面からの深さ最大45cmを測る。

遺物：出土遺物は非常に少なく、図示した1点のみである。6は無文の鉢形土器である。外面には粗いヘラミガキが施され、口縁部は波状を呈している。



第16図 32・33・72号土坑



第17図 32・33・72号土坑出土遺物

34号土坑 (第18図、図版 8)

位置：A-7

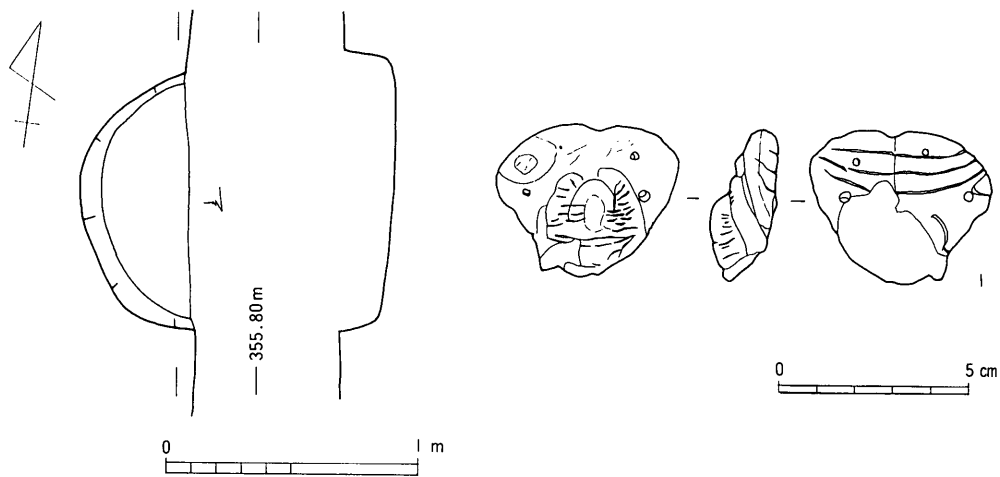
規模：直径100cm

平面形：円形

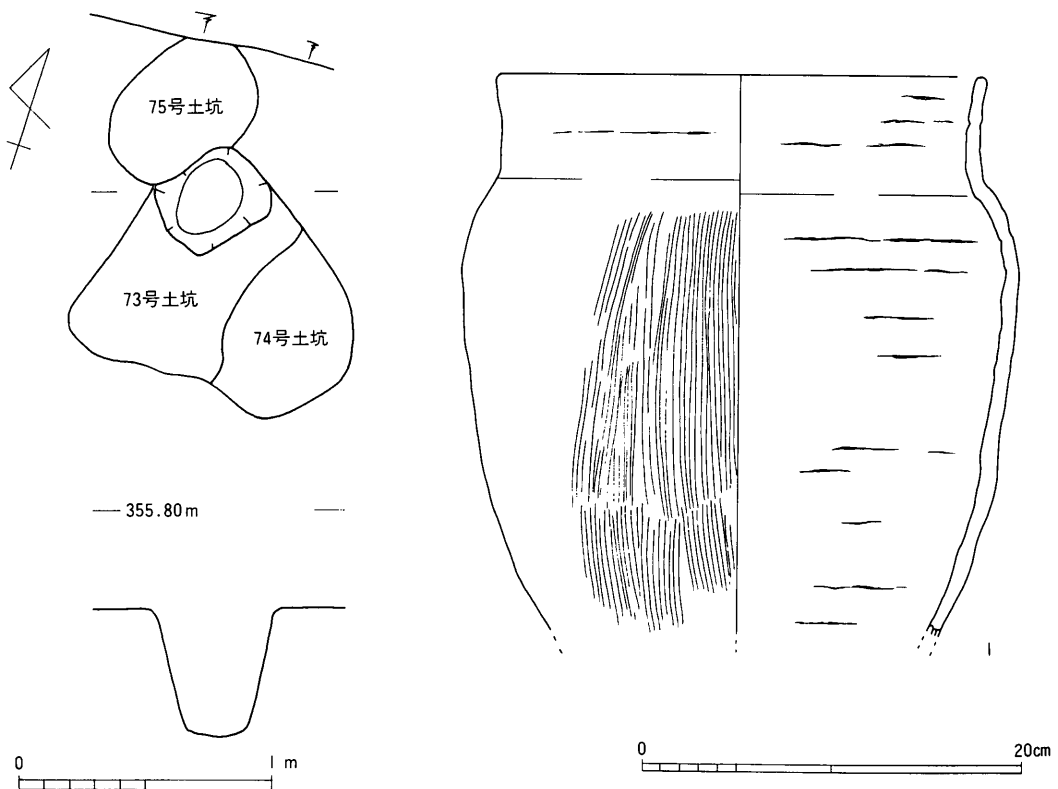
新旧関係：なし

構造：東側が調査区外になるため、全体の半分程度を検出しただけと思われる。平面形は円形を呈するものと考えられ、検出面からの深さ最大20cmを測る。

遺物：出土遺物は非常に少なく、図化できたものは1点のみである。1は黥面土偶の頭部である。顔面及び鼻部は粘土を貼り付けて高く表現されており、その周囲には入墨表現の沈線が表されているが目の表現は認められない。髪の毛の部分はハート形を呈し、4孔が穿たれている。裏面には結髪表現と思われる沈線が認められる。



第18図 34号土坑及び出土遺物



第19図 41号土坑及び出土遺物

41号土坑（第19図、図版8）

位置：B-11

規模：直径40cm

平面形：円形

新旧関係：73・75号土坑より古

構造：小形の遺構であったため、ピットである可能性もあるが、原形を保っていると考えられる遺物が出土したことから土坑としたものである。他の土坑と重複関係にあるため判然としないが、平面形は径40cm程の円形になるものと思われ、検出面からの深さ最大50cmを測る。

遺物：図示した1点の他には小破片がわずかに出土しているだけである。1は深鉢形の土器である。口頸部が緩くびれて体部へと続いている。体部外面には縦方向の細密な条痕文が施されているが、内面は未調整に近いナデであり、輪積痕を残している。縄文時代晩期、氷式土器の系統を引く土器と考えられる。

周辺遺構との関係から再葬墓である可能性もあるが、再葬墓とするにはあまりにも規模が小さい。

53号土坑（第20図、図版4・8）

位置：C・D-7・8

規模：120cm×84cm

平面形：隅丸長方形

主軸方向：N-79°-E

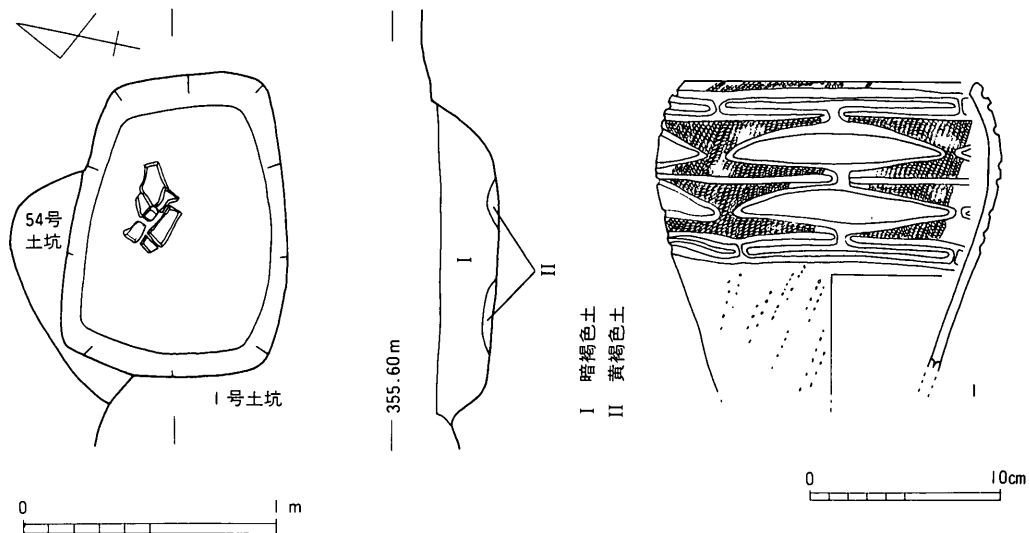
新旧関係：1・54号土坑より新

構造：平面形は隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ最大30cmを測る。壁の立ち上がりにはやや角度が認められ、土坑のほぼ中央付近から土器が出土した。土器は1個体分が出土しており、口縁部を外側に向け、内面が上を向いた状態で検出しているため、土圧により押し潰されたものと考えられる。

覆土：覆土は暗褐色土の単一土層であり、底面には部分的に地山の黄褐色土が混じっている。

遺物：図示した1個体分が出土している。鉢形の土器であり、口縁部はやや内わんしている。底部の破片が全く出土していないことから、底部を欠いた状態で埋設されたものと考えられる。体部上面には沈線による変形工字文が施され、その中を縄文が埋めている。沈線の中には赤色顔料の付着が認められるため、赤彩されていた可能性がある。

覆土中から骨片等の出土はなかったが、土器の出土状態や周辺遺構との関係から、土器棺再葬墓である可能性が高いものと考えられる。



第20図 53号土坑及び出土遺物

55号土坑 (第21・22図、図版5・9)

位置：D-8 規模：116cm×105cm

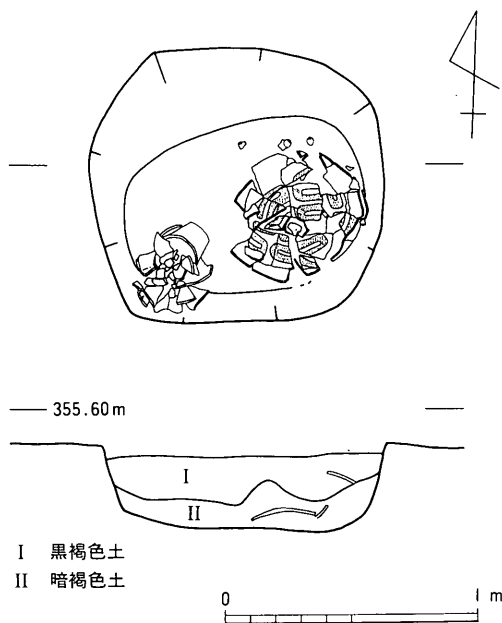
平面形：隅丸長方形

主軸方向：N-88°-E 新旧関係：なし

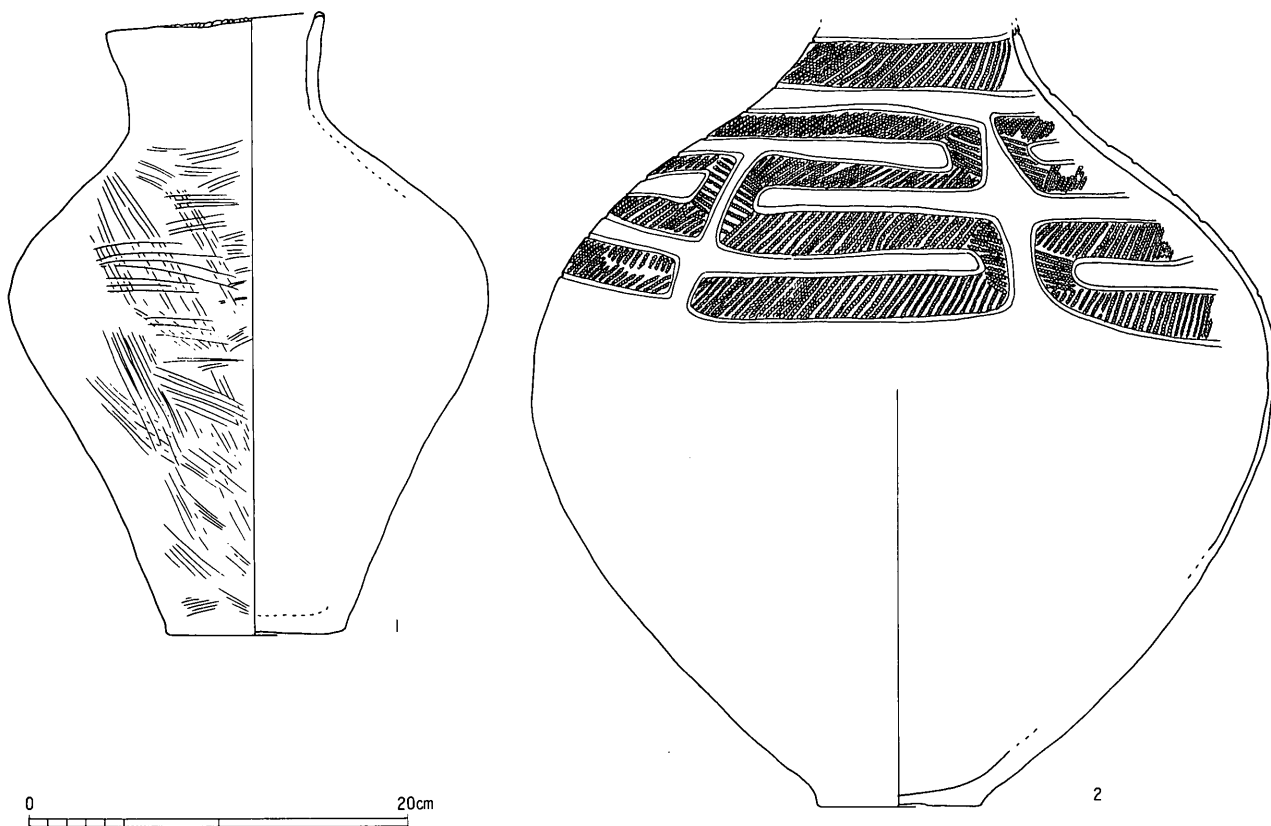
構造：平面形は隅丸長方形を呈し、検出面からの深さ最大30cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、北壁のみ立ち上がりはなだらかである。土坑内より2個体分の土器が出土している。いずれも土圧によって押し潰されているが、原位置を保っているものと考えられる。

覆土：覆土は2層に分けることができる。I層は黒褐色土であり、包含層の土が落ち込んだものと考えられる。II層は暗褐色土であり、黄褐色の地山ブロックを含んでいる。また、II層中からは骨粉を検出している。

遺物：図示した2点の土器の他に黒曜石の剥片が4点出土しているが、製品になるものではない。1は土坑西側より出土した壺形土器である。器形はなで肩で体部上半に最大径を有している。口唇部には刻みが付けられており、体部外面には条線文が認められる。2は東側より出土した壺形土器である。細頸壺になるものと思われるが、口頸部は欠失している。破断面がほぼ水平に打ち欠かれていることと、土器片の出土状況から口頸部を欠いた状態で埋設されたものと考えられる。体部外面は沈線により工字文が区画され、その中を縄文が埋めている。体部最大径39cmを測る大形の壺形土器である。



第21図 55号土坑



第22図 55号土坑出土遺物

覆土中から骨粉を検出していることから土器棺再葬墓と考えられる。2個体分の土器棺が埋設されているものであるが、土層断面から判断する限り、同時に埋設されたものと考えられる。

68号土坑（第23図、図版5）

位置：C・D-7 規模：88cm×80cm 平面形：不整形 主軸方向：N-5°-W

構造：不整形の掘方の北東寄りに径約45cmの楕円形の掘り込みが認められ、その中から同一個体と考えられる土器片が出土した。検出面からの深さ最大30cmを測る。

遺物：図示した1点のみ出土している。甕形土器の体部になると思われ、外面はヘラミガキ、内面はヘラケズリによって調整されている。

覆土中から骨片等の検出はなかったが、周辺遺構との関係から土器棺再葬墓である可能性がある。



第23図 68号土坑及び出土遺物

第3節 溝

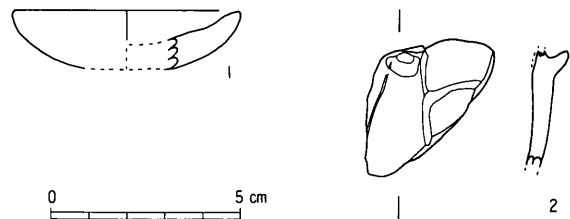
1号溝（第24・25図、図版5・9）

位置：D~G-3~7

規模：1,050cm×990cm 平面形：楕円形

主軸方向：N-38°-W 新旧関係：なし

構造：一部調査区外になるが楕円形の溝となるもので、北西側に開口部を持つ。溝の内側からは1号掘立柱建物跡、5・6・11~15号土坑、1~4号ピットを検出している。開口部からは

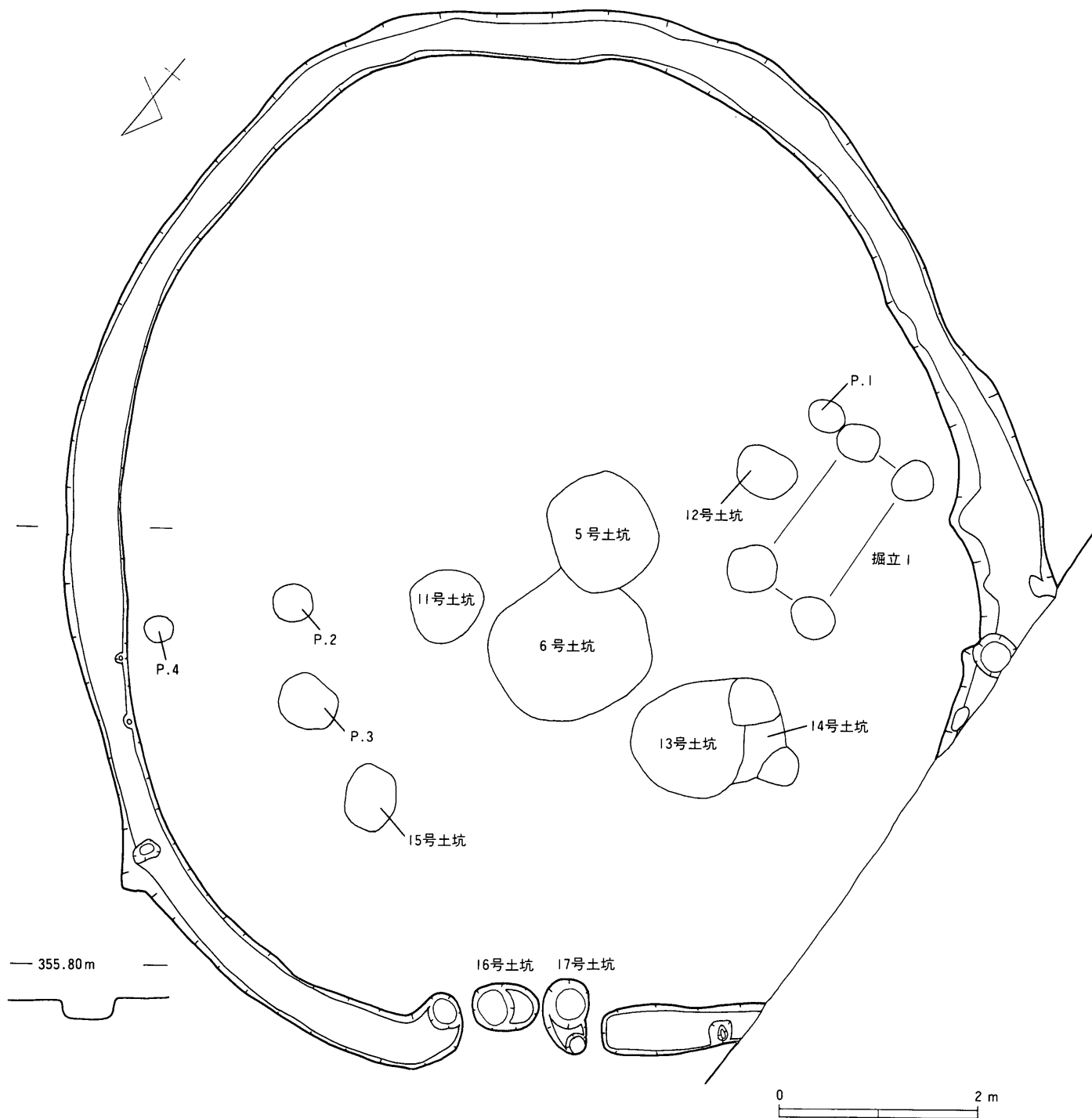


第24図 1号溝出土遺物

16・17号土坑を検出しているが、その構造から柱穴であったものと考えられる。溝断面は逆台形状を呈しており、検出面からの深さ最大20cmを測るが、調査区壁面の観察では包含層中より掘り込みが確認できるため、本来もっと深かったものと考えられる。上層が削平されているため即断できないが、1号溝とその内部から検出した遺構群は一連のものである可能性がある。

遺物：掘り込みがわずかしかなかったため、出土遺物は少ない。1は皿形の手づくね土器である。2は外面に沈線及び粘土粒の貼り付けが認められる土製品であり、その形状から容器形土偶である可能性がある。

1号溝検出当初は竪穴住居の外側を巡る溝である可能性も考えたが、溝内部及び周辺からは住居跡の検出は全くなかった。検出した土坑の多くが再葬墓であると考えられることから、墓域との関連が非常に強いものと考えられる。また、開口部から検出した柱穴の存在からこの部分に柵等、何らかの施設があったものと考えられる。



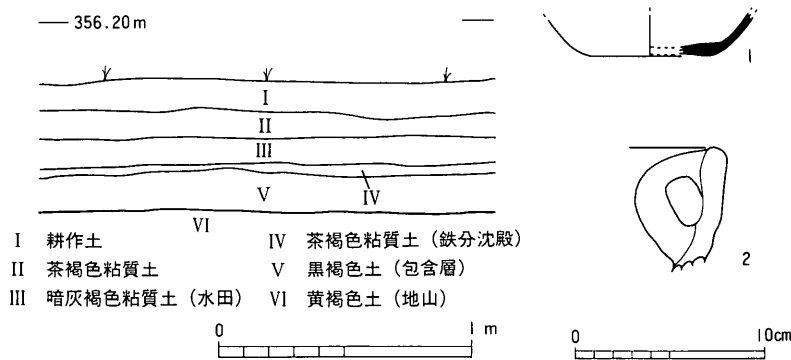
第25図 1号溝

第4節 その他の遺構と遺物

水田面（第26図）

現水田面の直下より水田面を1面検出している。調査期間の制約があり、面的な調査は行うことができなかったが調査区域内全域で確認している。断面での観察のため、畦畔等の構築物は検出することはできなかった。水田構築土よりわずかに遺物が出土している。1は須恵器坏であり、底部には回転糸切痕を残している。2は内耳土器である。

内耳土器が出土していることから、この水田面は中世以降のものと考えられる。

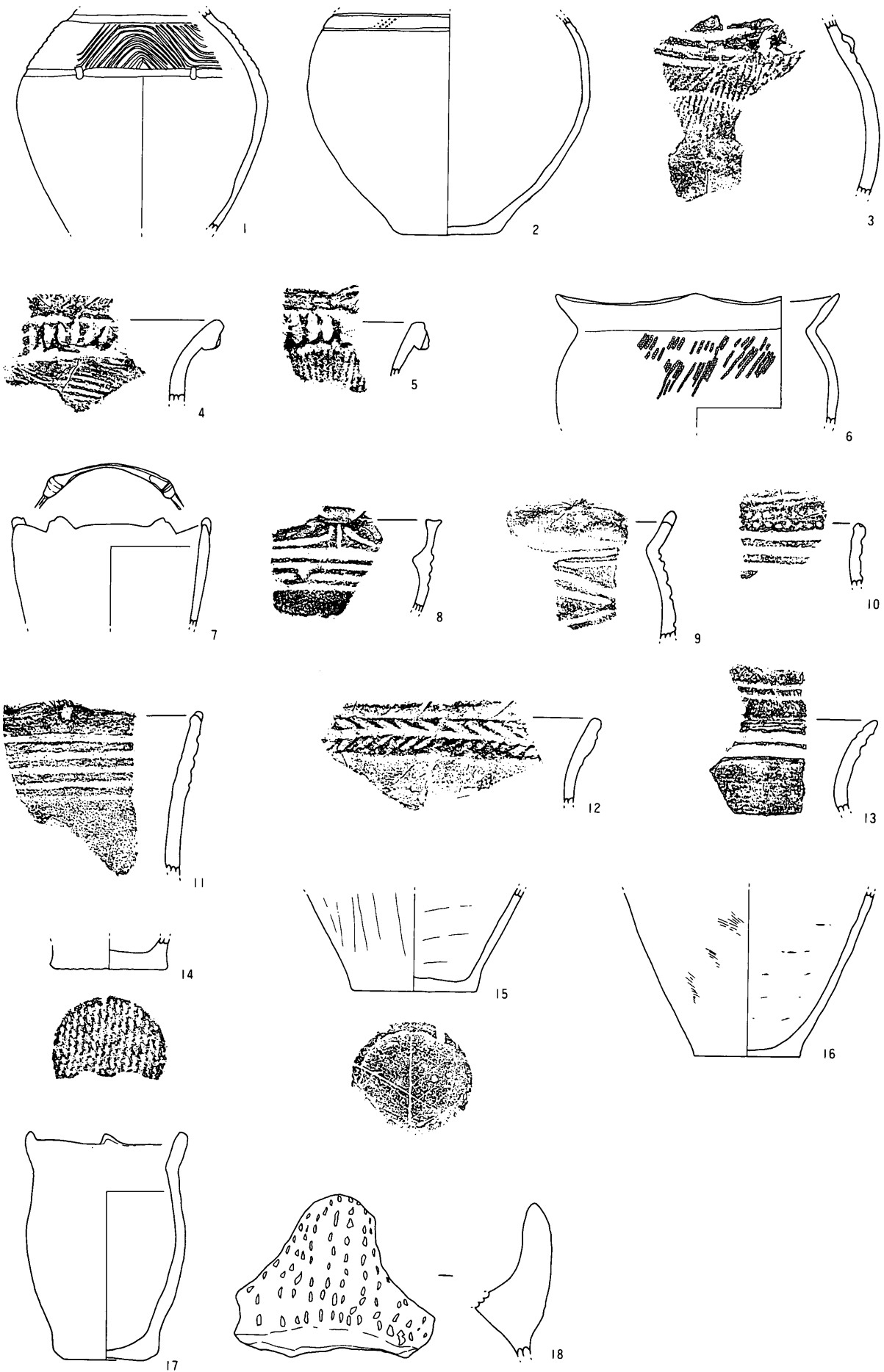


第26図 標準断面及び水田面出土遺物

その他の遺物 縄文～弥生土器（第27図、図版9・10・11）

特定の遺構以外から出土した遺物については、その他の遺物として取り扱う。

第27図1はC-3グリッドより出土した壺形土器である。口頸部及び底部を欠いているが、外面上部には櫛状工具による半円弧文が認められる。また、部分的に赤色顔料の付着が認められるため、赤彩されていた可能性がある。2はD-8グリッドより出土した壺形土器である。口頸部を欠いているが、外面上部には沈線及び縄文が認められる。出土地点周辺は土器棺再埋葬が集中する地点であり、土器の周囲から骨粉が検出されていることから、掘り込みは確認できなかったものの、土器棺再埋葬であった可能性がある。3は23号ピットより出土した壺形土器の体部である。外面には沈線及び縄文が認められ、部分的に赤色顔料が付着している。4、5は壺形土器の口縁部であり、粘土帯を貼り付け、そこに刻みを入れている。6はE-7グリッドより出土した鉢形土器である。口縁部は波状口縁を呈し、外面には縄文が認められる。7はA-6グリッドより出土したものである。壺または鉢形土器になるものと考えられ、口唇部には刻みの入れられた突起が付けられている。8～13はいずれも鉢形土器の口縁部と思われる。8の口唇部には台形の突起が付けられており、外面には沈線が認められる。9は頸部に明瞭な屈曲が認められ、外面には横方向及び斜め方向の沈線文が認められる。10の口唇部には2列の刺突が施されている。11は深鉢になるものと思われ、口頸部には5条の沈線が認められる。12の口縁部には扁平な粘土の貼り付けが認められ、矢羽状の刻みが付けられている。13の口縁部には内外面に2条の沈線が認められる。14～16は底部である。14の底面には網代痕が、15の底面には木葉痕及びへラ記号が認められる。また、16の外面には細密な条痕がわずかに認められる。17はB-11グリッドより出土した手づくね土器である。口唇部の5ヶ所程度に山形の突起が付けられており、外面はへラケズリによって調整されている。18はG-2グリッドより出土したもので、鉢形土器



第27図 その他の遺物1 縄文~弥生土器 (1,2,6,7,14~16 1:4 3~5,8~13 1:3 17,18 1:2)

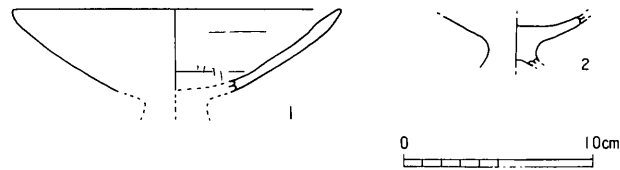
の突起部分になるものと思われ、外面には多くの刺突が施されている。

これらの土器は縄文時代晩期水式から弥生時代中期初頭の庄ノ畑段階に併行するものと思われるが、7、11はこれらに先行する佐野II式段階の無文土器に類例が認められるものである。1～3はいずれも細頸壺になるものと思われ、器形的には水式の影響を強く残しているものであるが、1は櫛状工具による施文が施されており、時期が若干下る可能性もある。4、5は水神平系の壺の口縁部になるものと思われる。8、9は浮線網状文が施された鉢形土器、13は口縁部の内外面に沈線が認められる深鉢形土器であり、いずれも水II式に併行するものであろう。15の外面には条線文が認められることから、林里段階のものと思われる。

土師器（第28図、図版9）

調査により出土した遺物の主体は縄文時代晩期～弥生時代中期の様相を示すものであるが、わずかながら古墳時代の遺物も出土している。1は66号土坑より出土した高坏の坏部である。内面に1段の稜が認められ、内外面ともヘラミガキされる。2はG-2グリッドより出土した器台である。器面荒れが著しく詳細は不明であるが、小形の器台になるものである。

この土器はいずれも古墳時代前期、4世紀後半代に位置付けることができるものである。遺跡を見下ろす山上に森將軍塚古墳が築造された時期に近接しているため、古墳との関係についても注目して行かなければならないであろう。



第28図 その他の遺物2 土師器

土製品（第29図、図版11）

1～3は黥面土偶の頭部である。1はB-6グリッドより出土したもので、頭部はほぼ完存している。頭部は半円形を呈し、耳飾表現と思われる2孔が穿たれている。顔面は粘土塊を貼り付けて高く表現されており、入墨表現と思われる沈線が斜めに施されているが、目の表現は確認できない。2は2号ピットより出土したもので、黥面の側面部になるものと思われる。表面には入墨表現と思われる沈線が施されているが、裏面は剝離しているため不明である。3は黥面の左半部である。眉の部分が高く盛り上げられ、その下には目の表現が認められる。6号土坑出土のものと同様であり、黥面付土器になる可能性もある。4、5は土偶の耳部になるものと思われる。4は3号ピットから出土したもので、貫通しない1孔が認められる。5は検出面から出土したもので、径約5mmの1孔が穿たれている。6はD-7グリッドより出土した土偶の体部である。右上半部の破片と思われる。表面には乳房表現と思われる粘土の貼り付けが認められる。また、裏面には3条の沈線が施されている。7はE-4グリッドより出土した土偶の下半部である。左脚部分が残っているものと思われ、内腿に当たる部分には線刻が認められる。また、腰に当たる部分には粘土が剝離した痕跡が認められることから、ふくよかな尻の表現があったものと思われる。8、9は土偶の脚部である。8はB-7グリッドより出



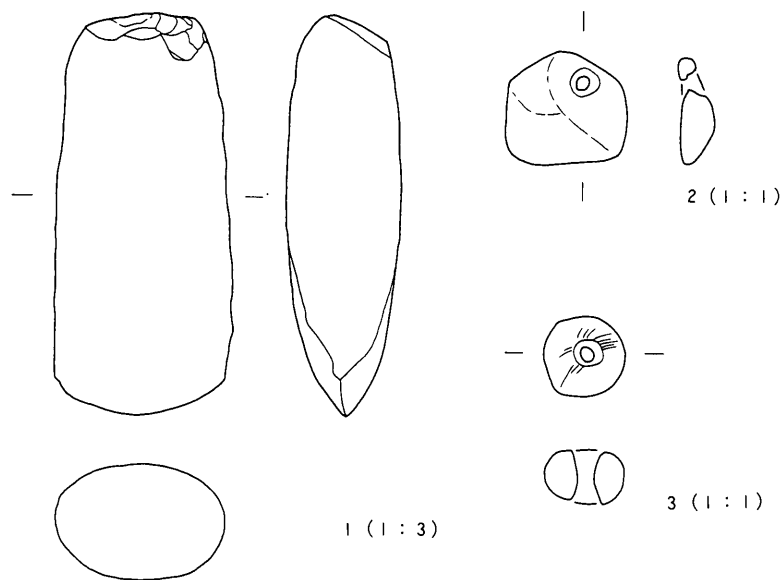
第29図 その他の遺物 3 土製品

土したもので、右足になるものと思われる。側面全体に2段の円形の圧痕が認められる。足飾りの表現であろうか。9はB-8グリッドから出土したものであるが、左右の別は定かでない。8と隣接したグリッドより出土しているが、足飾り表現が認められず、また大きさも違うため、別個体であろう。10、11は土偶の腕部または脚部になるものと思われる。10はD-7グリッドより、11はC-4グリッドより出土したものである。12はF-8グリッドより出土した土製品である。平面形は円形を呈するものと思われ、裏面には剝離痕が認められる。土偶の顔面部である可能性もあるが、顔面各部の表現や入墨の表現は認められないため、用途不明の土製品として扱った。13はC-4グリッドより出土した匙形土製品である。14は24号土坑より出土した用途不明の土製品である。表面には沈線による文様が施され剝離痕が認められることから何らかの土製品の一部と考えられるが、小破片のため不明である。15はC-6グリッドより出土したものである。平面形は円形になるものと思われ、側面に溝状のくぼみが巡っている。黥面土偶の一部になる可能性が考えられるが、小破片のため明らかではない。16はG-6グリッドより出土したものである。高坏状の土製品の脚部に似ているが小破片のため不明である。17、18はほぼ全面に赤色顔料の付着した土製品の破片であり、17は10号土坑より、18はB-5グリッドより出土したものである。19、20は土器片加工板である。いずれもG-8グリッドより出土したもので、土器片のほぼ中央に1孔が穿たれている。

石器・石製品 (第30図、図版11)

いずれも検出面から出土している。1はE-6グリッドより出土した磨製石斧であり、表面は風化が著しい部分もあるが丁寧に研磨されている。2はD-3グリッドより出土した垂飾である。平面形は五角形をしており、径3mmほどの1孔が穿たれている。色調は淡緑色をしており、表裏面とも良く研磨されている。3はF-3グリッドより出土した玉であり、色調は濃緑色をしている。

この他にも、調査区域内より多数の黒曜石剥片が出土している。これらの中には子供の拳大のものも含まれているため、石核として持ち込まれたものも含まれていると考えられる。



第30図 その他の遺物4 石器・石製品

屋代清水遺跡土坑一覽

番号	位置	形態	主軸方向	規模	新旧関係	備考
1	D-7・8	不整形		86×64	53号土坑より古	詳細本文中
2	F-5	円形		70		
3	G-5	隅丸方形	N-15-W	102×90		
4	D・E-8	隅丸長方形	N-39-E	120×88		詳細本文中
5	F-5	隅丸方形	N-66-W	112×102	6号土坑より新	詳細本文中
6	F-5	楕円形	N-12-E	160×136	5号土坑より古	詳細本文中
7	F・G-1	円形?		100		詳細本文中
8	F-3	不整円形		96×68		
9	D-1・2	円形		60		詳細本文中
10	D-3	楕円形	N-84-E	80×66		
11	F-5	円形		78		
12	F-4	円形		60		
13	G-5	不整楕円形	N-41-E	116×114	14号土坑より新	詳細本文中
14	G-5	不整形		100×	13号土坑より古	
15	F-6	楕円形	N-37-W	68×53		詳細本文中
16	G-6	楕円形	N-52-E	66×46		
17	G-6	不整円形	N-48-W	76×46		
18	E・F-7	不整形		120×80		
19	G-8	楕円形	N-35-W	100×70		
20	G-9	円形		72		
21	G-9	不整円形	N-24-E	100×70		
22	F-9	隅丸長方形	N-26-W	104×82		詳細本文中
23	G-11	長方形	N-6-W	88×		
24	F-11	不整円形	N-41-W	90×72		
25	E・F-9	楕円形	N-73-W	150×126	70号土坑より古	詳細本文中
26	E-9	円形		26		
27	E-9・10	方形	N-10-E	90×82		
28	A・B-2	楕円形	N-23-W	53×		
29	A・B-2	円形		64		
30	B-3	円形		70		
31	B-6	不整円形		76×72		
32	A・B-6	方形	N-72-W	160×	72号土坑より新	詳細本文中
33	B-6・7	円形		74	72号土坑より新	詳細本文中
34	A-7	円形		100		詳細本文中
35	B-7	不整円形		50		
36	B・C-8	楕円形	N-39-W	86×60		
37	C-8	楕円形	N-32-W	90×60		
38	B-8	隅丸方形	N-14-E	170×138		

番号	位置	形態	主軸方向	規模	新旧関係	備考
39	B-9	不整形		74×60	71号土坑と切り合う	
40	A-10	不整形	N-6-W	120×		
41	B-11	円形		40	73・75号土坑より古	詳細本文中
42	B-10	隅丸方形	N-16-W	72×66		
43	C-11	不整形		72×60		
44	C-11	不整円形		66×56		
45	C-10・11	楕円形	N-28-W	86×58		
46	C・D-11	楕円形	N-5-E	78×48		
47	D-11	長方形	N-43-W	54		
48	D-11	不整形		86		
49	C・D-10	楕円形	N-33-W	102×43		
50	C-9	楕円形	N-85-W	125×95		
51	D・E-8	隅丸方形	N-62-E	111×82		
52	E-8	円形		26		
53	C・D-7・8	隅丸長方形	N-79-E	120×84	1・54号土坑より新	詳細本文中
54	D-8	不明			1・53号土坑より古	
55	D-8	隅丸長方形	N-88-E	116×105		詳細本文中
56	D-9	隅丸方形	N-20-W	110×105		
57	D-9	不整形		72×64		
58	C-10	楕円形	N-36-E	80×52	59号土坑より新	
59	C-10	不整形		134×112	58号土坑より古	
60	C-10	楕円形	N-42-W	53×36		
61	G-7	不整円形		50×36		
62	C-6	不整形		110		
63	C-10	不整形	N-60-W	93×66		
64	C-10	不整円形	N-42-W	60×54		
65	B-10	不整形		105×68		
66	D-7	隅丸長方形	N-27-W	164×74		
67	B・C-10・11	楕円形	N-15-E	130×46		
68	C・D-7	不整形	N-5-W	88×80		詳細本文中
69	D・E-6	円形		90		
70	E・F-9	楕円形	N-73-W	100×80	25号土坑より新	詳細本文中
71	B-9	不整形	N-20-E	68×66	39号土坑と切り合う	
72	B-6	方形	N-0-W	110×		詳細本文中
73	B-11	不整形		96×30	41・47号土坑と切り合う	
74	B-11	不整形		66×50	73号土坑と切り合う	
75	B-11	楕円形	N-32-E	64×42	41号土坑より新	
76	B・C-10	不整形	N-54-W	90×74		

第5章 まとめ

屋代清水遺跡ではこれまでに3回の発掘調査が実施され、多くの遺構・遺物が検出されている。特に、平成3年度に実施した長野県立歴史館建設に伴う発掘調査は、総調査面積18,000㎡に及び、縄文時代の掘立柱建物跡や弥生時代中期及び古墳時代中期の住居跡などが検出されている。また、縄文時代晩期最終末とされる埋甕を伴う土坑が2基検出されており、今回の調査成果と併せ、注目される。

今回の調査地点は県立歴史館の敷地から水田を1枚挟んだ西側に位置しており、県立歴史館調査の成果からは、遺構・遺物の密度が希薄になってくるとの想定がなされていた。調査では予想に反して多くの遺構・遺物が検出され、予想を覆す結果となった。特に弥生時代前期～中期初頭にかけての土器棺墓を含む再葬墓群が検出され、更埴市域ではかつてない調査となった。以下、今回の調査で注目された点についてふれ、まとめとしたい。

1 屋代清水遺跡出土の黥面付土器・土偶

今回の調査で出土した黥面付土器・土偶は15点を数える。この他に、県立歴史館調査の際に2点、平成14年度に実施した排水路建設に伴う調査で3点が出土しており、屋代清水遺跡でこれまでに出土した黥面付土器・土偶の総数は20点余になる。これらの土器・土偶の出土状況は表1に示したとおりであり、検出面からの出土が最も多いが、いずれも単独の出土となっている。また、小破片としての出土であり、全形を窺い知ることのできるものはない。ただし、遺構検出面が現地表下約30cmと浅く、本来の遺構面が削平されていることが考えられるため、検出面出土のものについても本来は遺構に伴うものであった可能性はある。内訳は黥面付土器2点、容器形土偶の可能性のあるものが1点で、残りは土偶になるものと考えられる。出土部位別では顔面の部分が9点であり、全体の約半数を占めている。更埴市内ではこの他に、平成2年度に実施した城ノ内遺跡においても土坑内より黥面付土器が出土している。

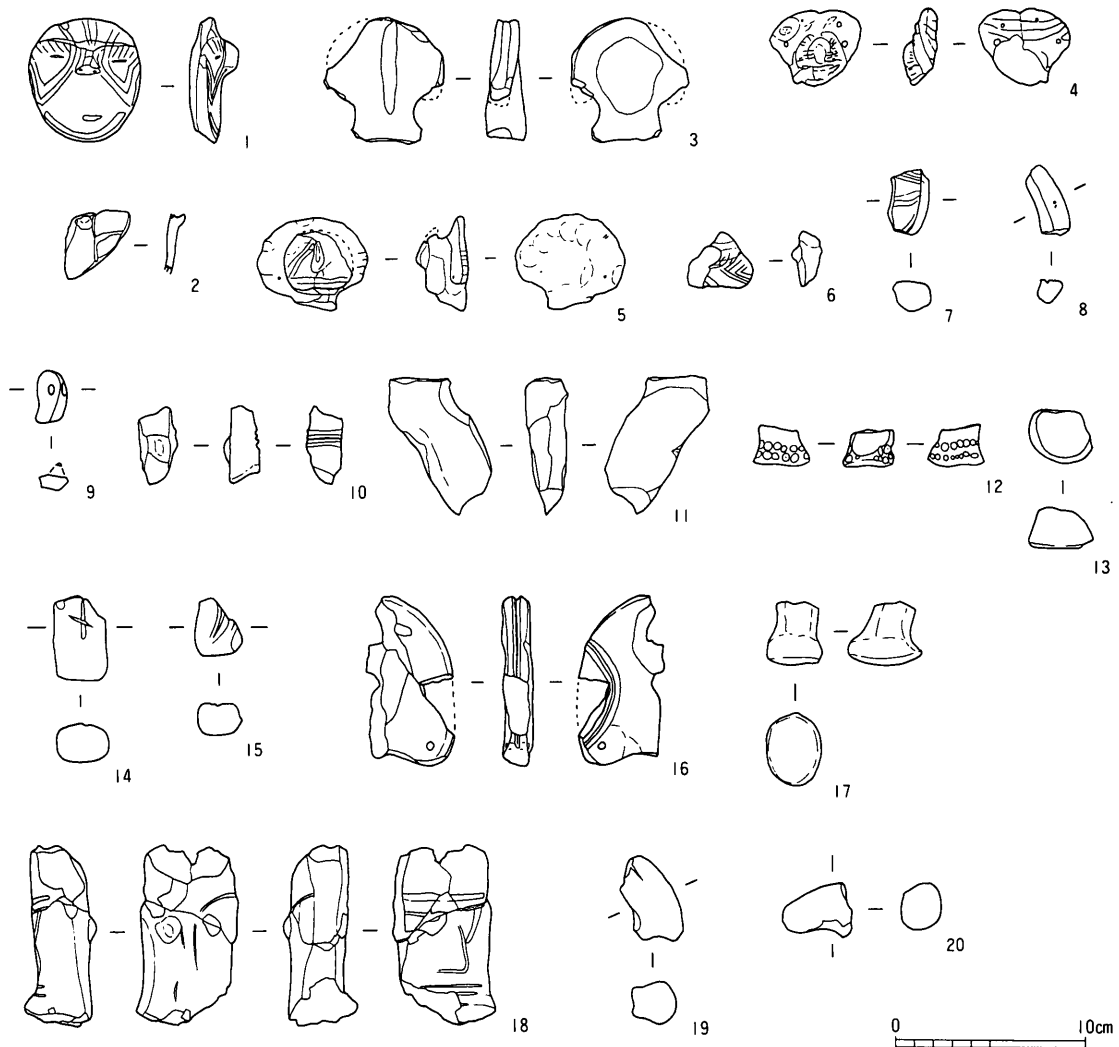
表1 屋代清水遺跡出土黥面付土器・土偶一覧

図No.	種別	出土状況	備考	図No.	種別	出土状況	備考
1	黥面付土器	6号土坑		11	土偶脚部	検出面	
2	容器形土偶?	1号溝		12	土偶脚部	検出面	
3	黥面土偶	7号土坑		13	土偶脚部	検出面	
4	黥面土偶	34号土坑		14	土偶脚部	検出面	
5	黥面土偶	検出面		15	土偶脚部	検出面	
6	黥面付土器	検出面		16	黥面土偶	検出面	平成3年度調査
7	黥面土偶	ピット2		17	土偶脚部	検出面	
8	黥面土偶	ピット3		18	土偶体部	土坑	平成14年度調査
9	黥面土偶	検出面		19	土偶脚部?	土坑	
10	土偶体部	検出面		20	土偶腕部	検出面	

このうち最も遺存状態が良好であったものは6号土坑より出土した黥面付土器（第31図1）であり、黥面部が完存している。眉及び鼻は粘土を盛り上げて立体的に作られており、目、口及び入墨の表現は鋭い沈線で表現されている。また、沈線の内部には赤色顔料の付着が認められることから、赤彩されていた可能性がある。黥面部の裏面は全面に渡って剥離痕が認められることから、土器本体と黥面部とは別造りであったものと考えられる。土坑内からはこの他に土器の破片が少量出土しているだけであり、この黥面付土器と同一個体になると考えられる破片は全く出土していない。これは他の土坑から出土した黥面付土器・土偶についても同様であり、当初から黥面付土器・土偶の一部のみを土坑内に埋設したものと考えられる。

土偶は今回の調査で12点出土している。顔面部の残っているものには入墨の表現が認められるため、出土した多くの土偶が黥面土偶になるものと考えられる。第31図18は排水路建設に伴う調査により出土したものであるが、覆土中に骨片が含まれる土坑内から出土したものであり、再葬墓に伴う遺物である可能性が指摘できる。このことから、今回の調査によって出土した土偶についても再葬墓に伴う遺物と考えられ、葬送に関わる祭祀儀礼の中で埋設されたものと考えられる。

黥面付土器や土偶容器はその形状や出土状況から骨蔵器としての機能が想定されており、弥生時代前期を中心として東日本の各地で散見されている。本遺跡での黥面付土器の出土状況は、個体の一



第31図 屋代清水遺出土黥面付土器・土偶

部のみを土坑内に埋設したものと考えられることから、容器としての機能は失われていたものと考えられる。この埋設方法は本遺跡における土偶の埋設方法と同じである。このことから、葬送に関わる儀礼の中で人の形をした土製品の一部を使用する行為があったものと考えられ、そこでは黥面付土器も土偶も同じ人の形をした土製品として扱われていたものと考えられる。

黥面付土器・土偶を出土した遺構からは他の出土遺物がほとんどなく、その時期を推定することは非常に困難であるが、黥面付土器を出土した6号土坑と重複関係にある5号土坑からは条痕文土器が出土している。このことから、5号土坑は弥生時代前期に遡り得る可能性が指摘でき、6号土坑は5号土坑よりも古いことから、その時期は弥生時代前期以前ということになる。また、黥面土偶は縄文時代晩期を中心に作られたものと考えられており、20点以上の土偶が出土した松本市石行遺跡のものは縄文時代晩期最終末から弥生時代前期初頭と考えられている。屋代清水遺跡出土の黥面土偶もほぼ同時期のものと考えられるが、黥面付土器が土偶と同様な使用をされていることから、弥生時代まで下るものと考えられる。

2 土器棺再葬墓

調査で検出した土坑の内、土器棺再葬墓と考えられるものは7基検出した。遺構の遺存状況が比較的良好な土坑内からは、ほぼ完形に復原可能な土器が出土しており、1、55号土坑中からは骨片が出土している。特に1号土坑は大形の壺形土器の頸部を打ち欠いて逆位の状態で伏せ、その内部に小形の壺形土器を埋設しているものである。また、55号土坑は2個体の土器棺が並列して埋設されていたものである。70基余り検出した土坑の内、覆土に骨粉や炭化物を含んでいる土坑は30基ほどを数えることができる。詳細な分析等を行っていないが、これらの土坑の多くが再葬墓になるものと考えられる。このような再葬墓群の検出は更埴市周辺においては、長野県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われている上山田町力石条里遺跡群が知られているだけである。本遺跡と力石条里遺跡群とは、南側に山地を抱えていること等、遺跡の立地に共通性が認められる。屋代清水遺跡周辺では平成15年度以降も開発事業に伴う調査が計画されており、新たな調査成果が期待される。

最後に今回の調査に当たり、関係の皆様のご協力に対し深く感謝申し上げます、まとめとします。

写真図版



調査地遠景
(森將軍塚古墳より)



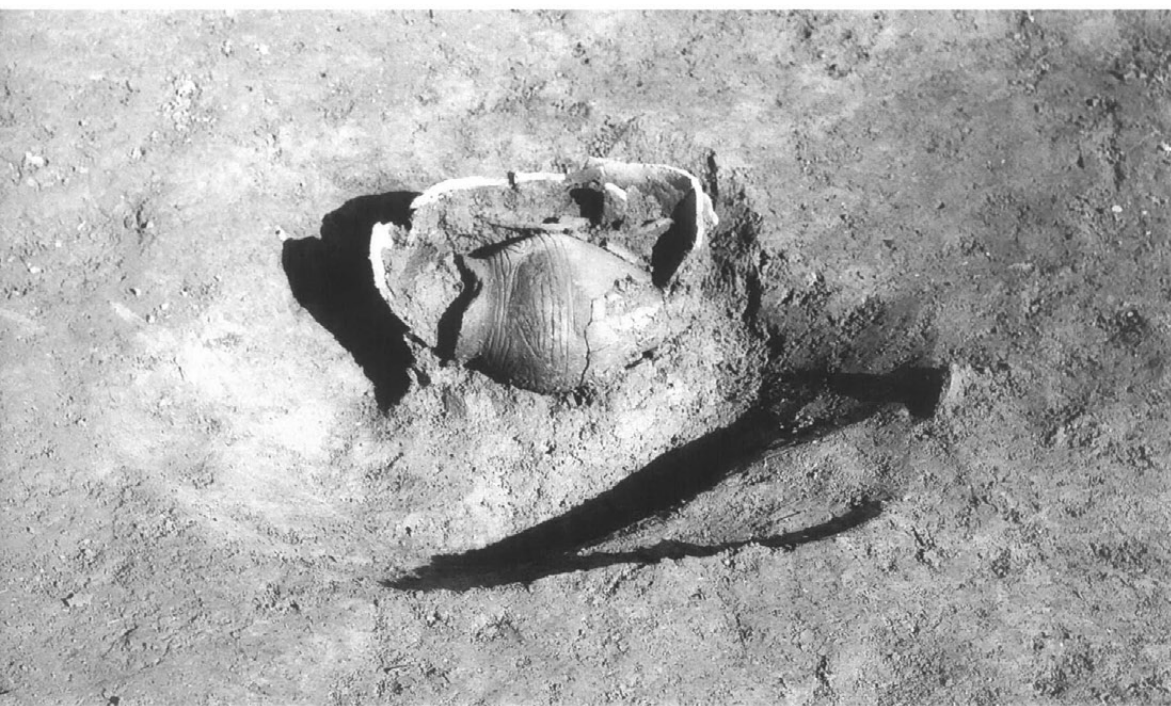
調査区全景
(北側より)



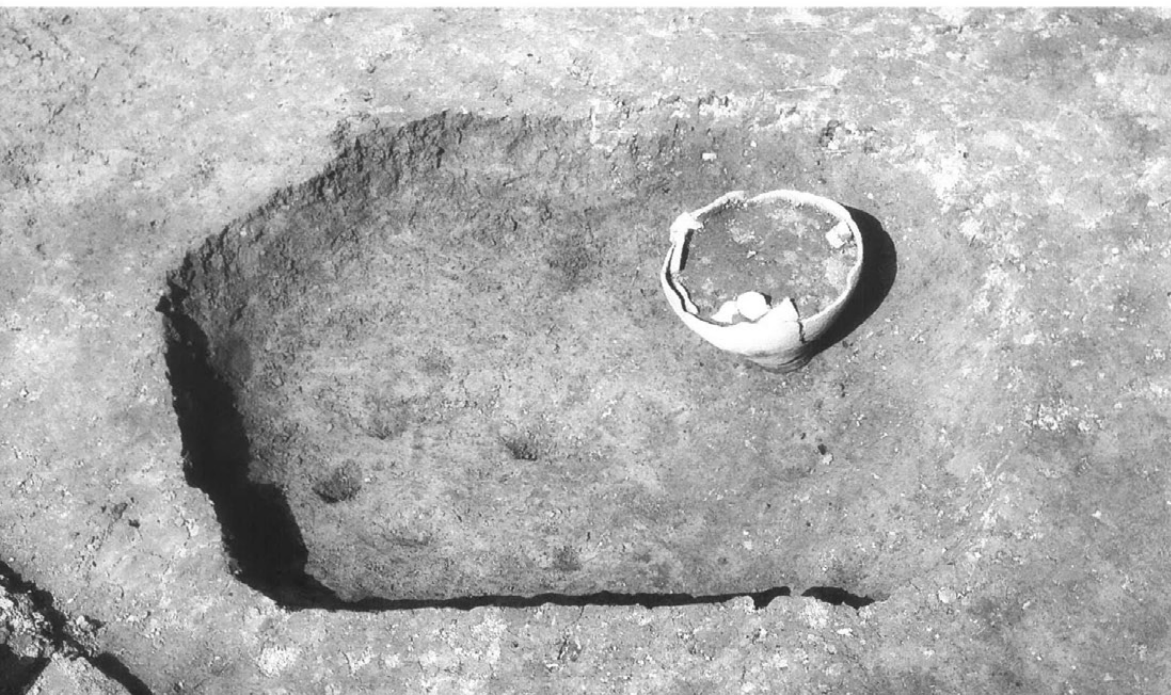
発掘調査風景



1号土坑遺物出土状況



1号土坑遺物断ち割り



4号土坑



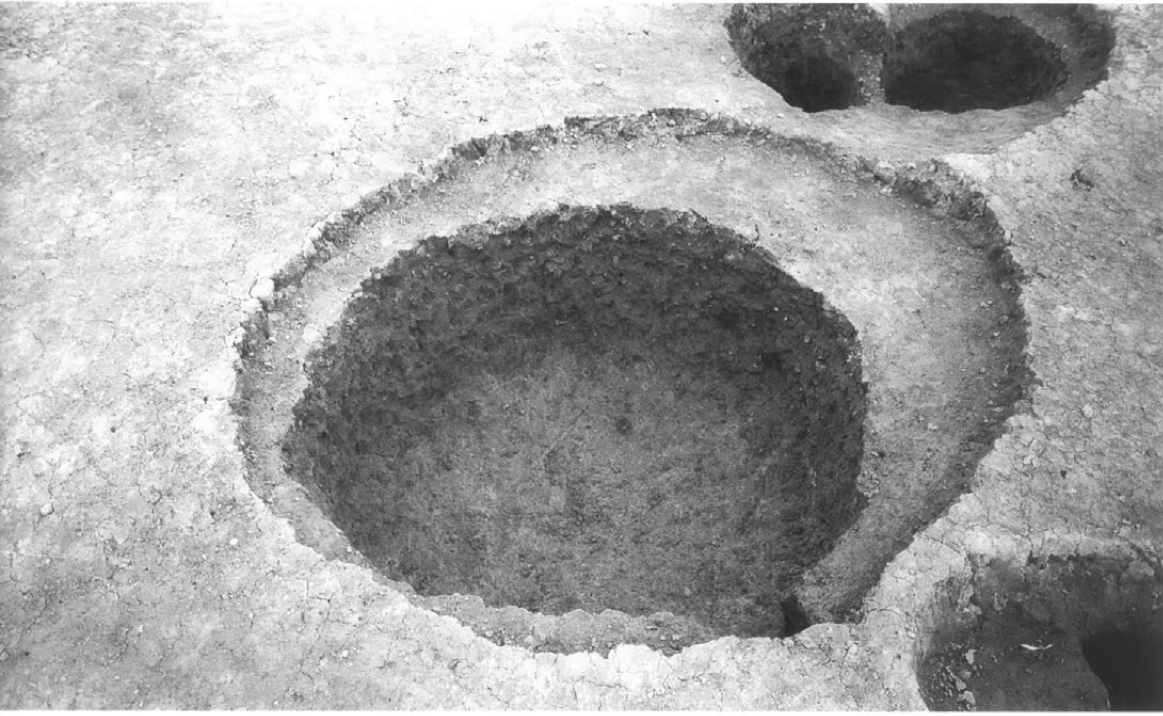
5号土坑



6号土坑



25号土坑遺物出土狀況



外 25号土坑
内 70号土坑



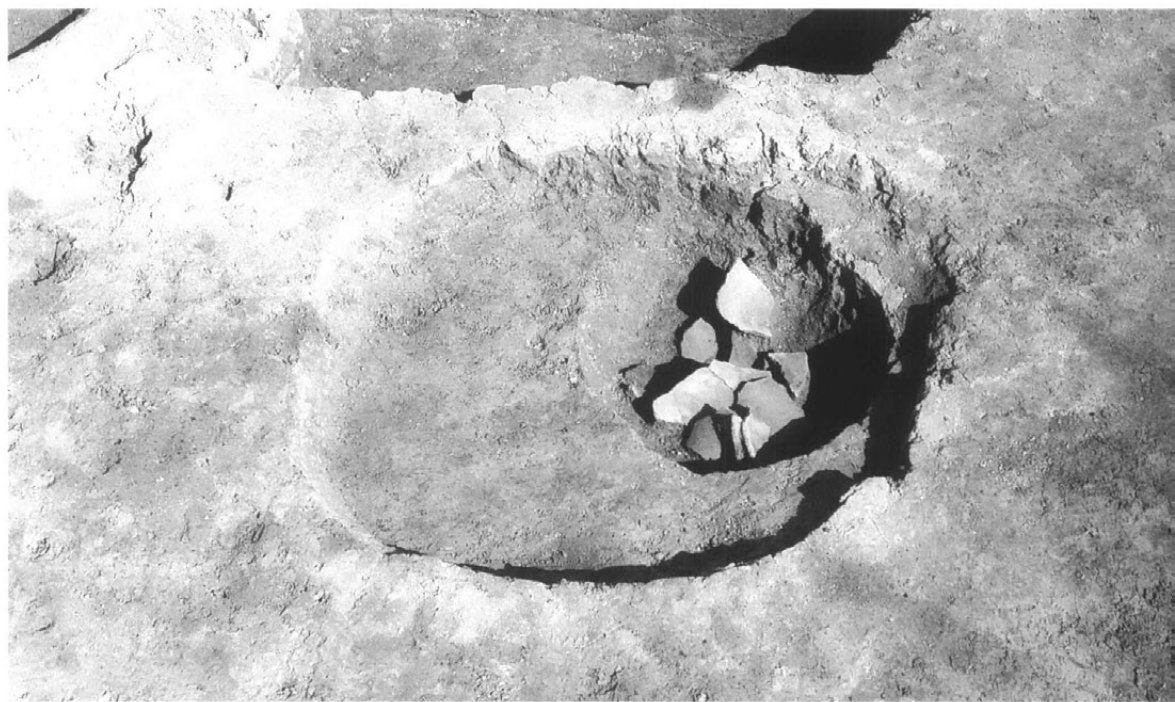
33号土坑



53号土坑



55号土坑



68号土坑



1号沟

1号土坑出土遺物 (約1:3)



1

4号土坑出土遺物 (約1:3)



1



2

5号土坑出土遺物 (1 約1:3 2,3 約1:2)



1

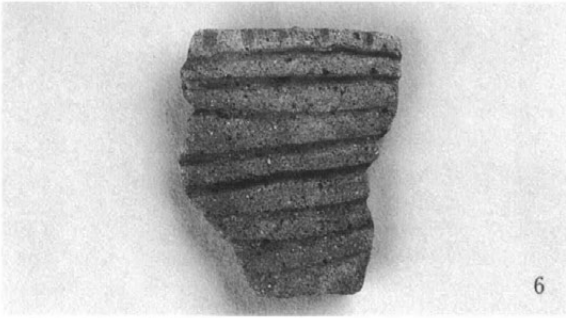


2

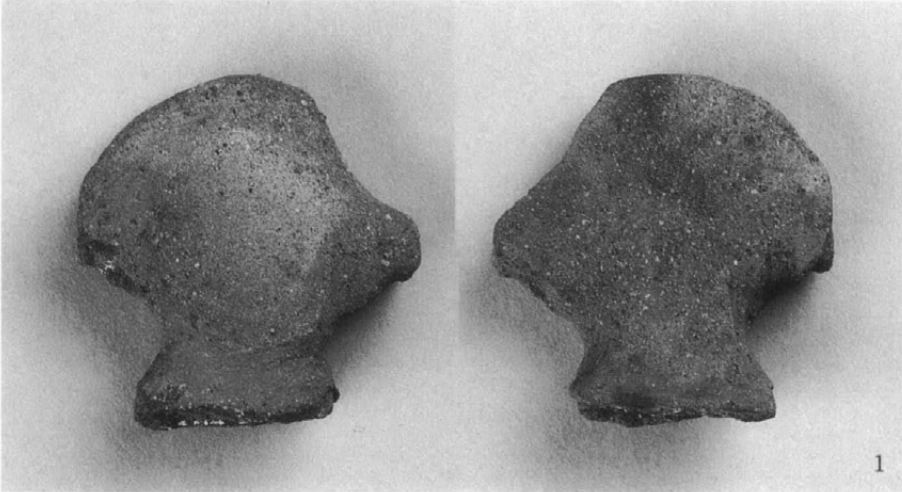


3

6号土坑出土遺物 (約 2 : 3)



7号土坑出土遺物 (約 2 : 3)



13号土坑出土遺物 (約 1 : 3)



9号土坑出土遺物 (約 1 : 3)

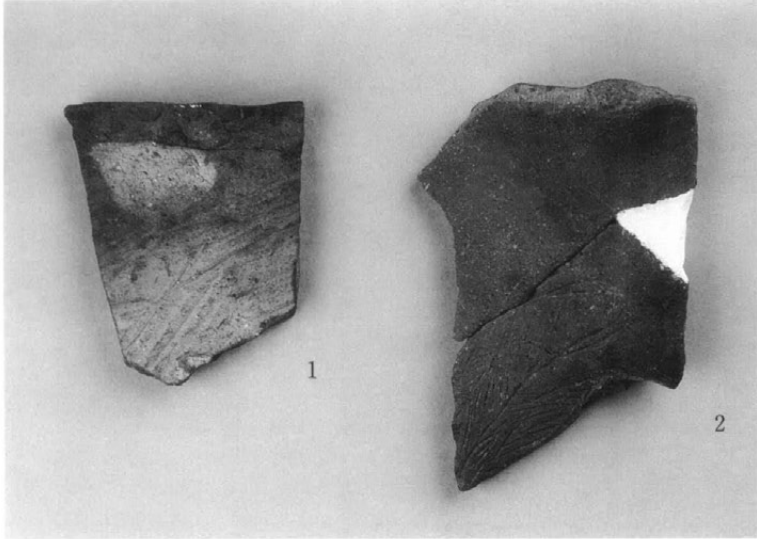


15号土坑出土遺物 (約 1 : 3)



図版 8

22号土坑出土遺物 (約 2 : 3)



25号土坑出土遺物 (約 1 : 3)



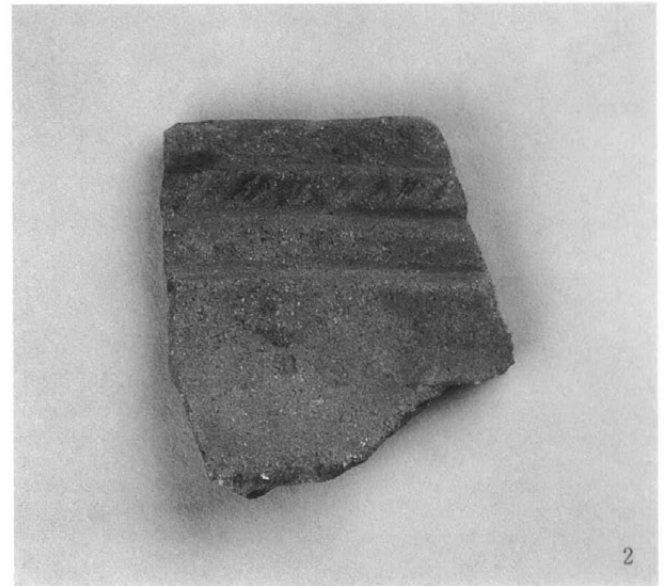
34号土坑出土遺物 (約 2 : 3)



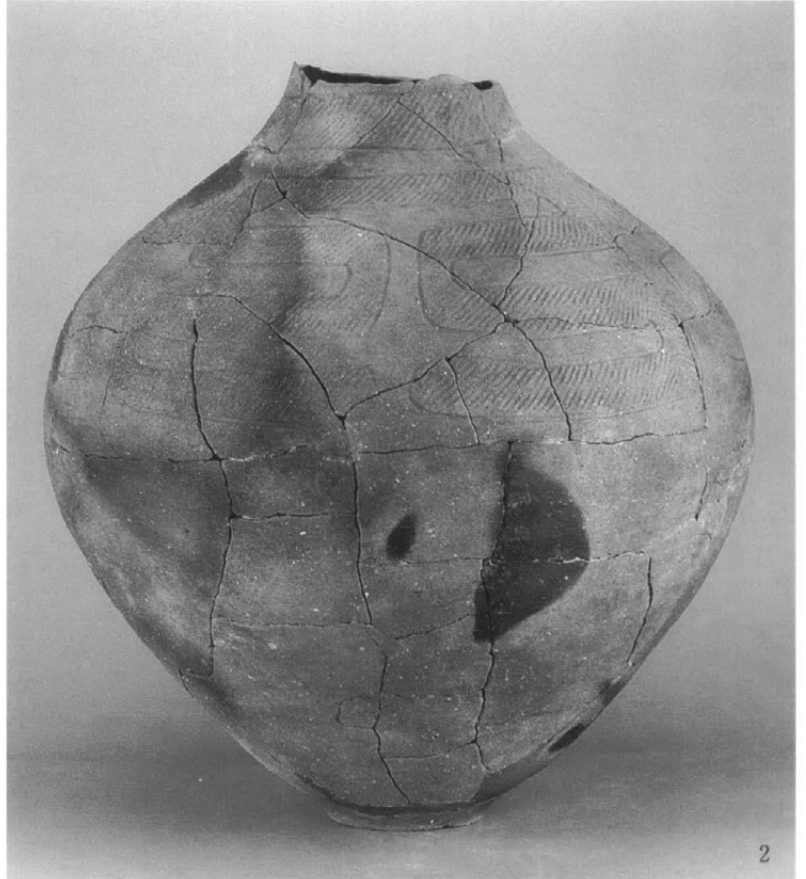
41号土坑出土遺物 (1 約 1 : 4 2 約 1 : 2)



53号土坑出土遺物 (約 1 : 3)



55号土坑出土遺物 (約 1 : 4)



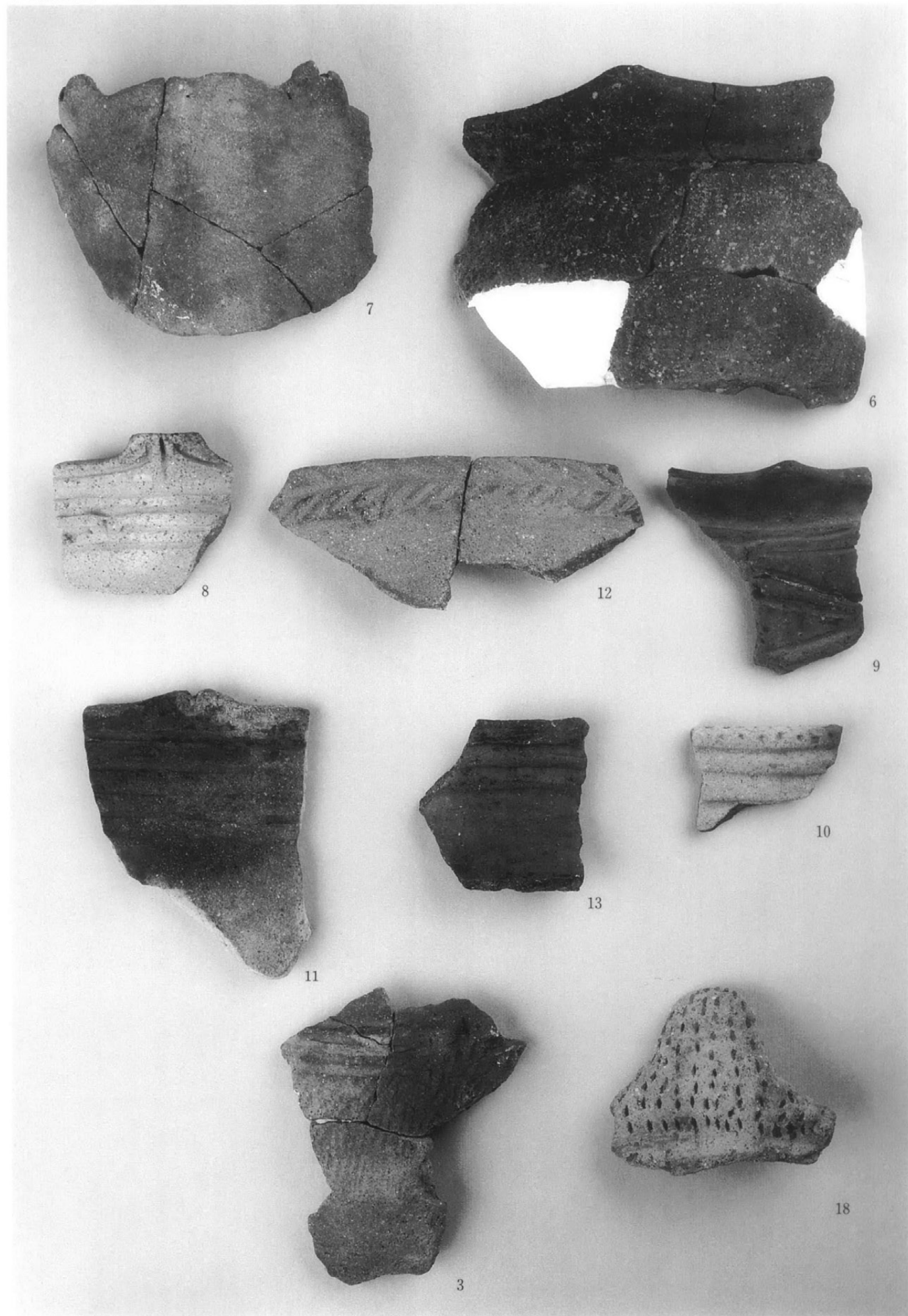
その他の遺物 1 縄文~弥生土器 (1、2、16 約 1 : 4 17 約 1 : 2)

1号溝出土遺物 (約 2 : 3)



その他の遺物 2 土師器 (約 1 : 3)



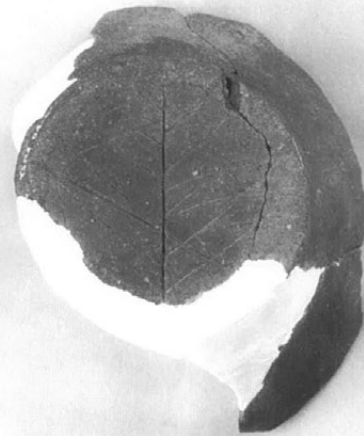


その他の遺物2 縄文~弥生土器 (約1:2)

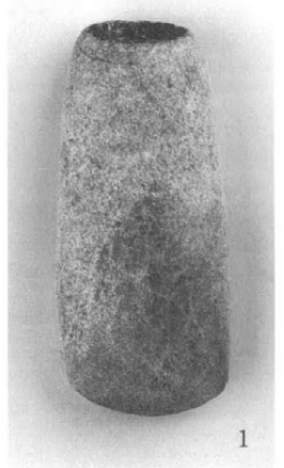
石製品 (約1:3)



14

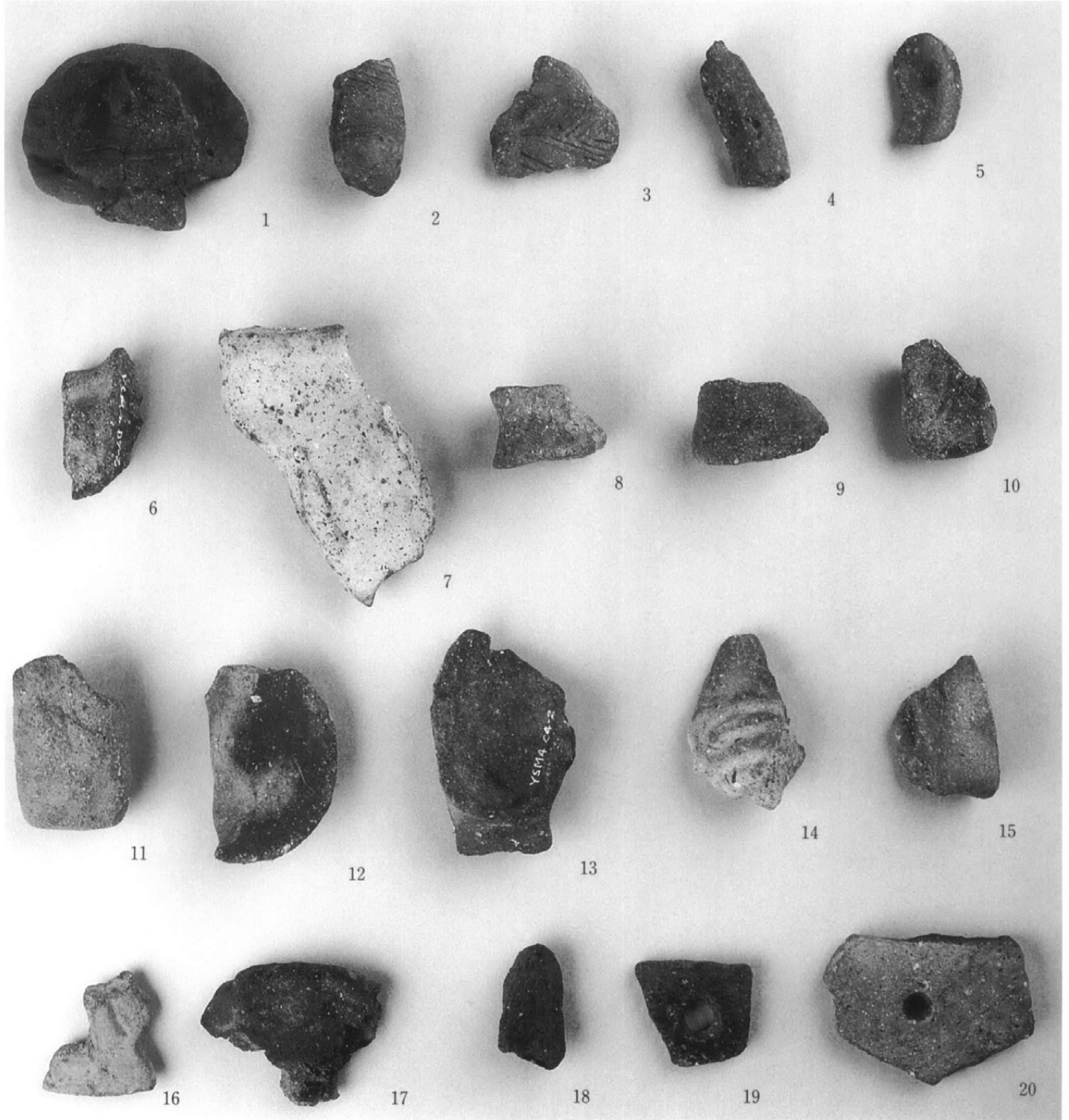


15



1

その他の遺物3 土製品 (約2:3)



報告書抄録

ふりがな	やしろしみずいせき2							
書名	屋代清水遺跡II							
副書名	科野の里ゲートボール場建設に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小野紀男							
編集機関	更埴市教育委員会 生涯学習課 文化財係							
所在地	〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地 TEL 026-273-1111							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やしろしみず 屋代清水	ながの けんこうしよくし 長野県更埴市大字 やしろしみず 屋代字清水260番地	20216	29-1	36 31 50	138 8 12	20020225~ 20020405	600	科野の里 ゲートボ ール場建 設に伴う 発掘調査
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物		特記事項	
屋代清水	墓址	縄文時代 弥生時代	掘立柱建物跡	1棟	縄文土器、弥生土器、土 師器、須恵器	弥生時代前期から中 期初頭にかけての再 葬墓群を検出		
			土坑	76基				
			溝	3棟	石器			
			ピット	71基				
	水田跡	中世	水田面	1面				

屋代清水遺跡Ⅱ一科野の里ゲートボール場建設に伴う発掘調査報告書一

発行日 平成15年 3月31日

発行 更埴市教育委員会

〒387-8511 長野県更埴市杭瀬下84番地

電話 (026) 273-1111

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381-0037 長野県長野市西和田470

電話 (026) 243-2105

